

秋田城跡歴史資料館年報 2019

秋 田 城 跡



秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2019

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報2019

正 誤 表

ページ	行	誤	正
18	上から 5 行目	桁行一間 (1.8m)、梁間 2 間 (2.7m + 2.7m)	梁間一間 (1.8m)、桁行二間 (2.7m + 2.7m)
36	表 3 中 SB2545 の備考欄	桁行一間 (1.8m)、梁間 2 間 (2.7m + 2.7m)	梁間一間 (1.8m)、桁行二間 (2.7m + 2.7m)

序 文

令和元年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区南西部と大畠地区西部の2箇所で実施し、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されるなど、多くの成果をあげることができました。

第112次調査では、焼山地区南西部の城内区画施設の南部分を調査し、焼土遺構や堅穴建物跡、鍛冶生産に関わる遺物を確認しました。城内区画施設内の実態解明と周辺の利用状況を知る上で重要な知見を得ることができたといえます。第113次調査では政庁西側を調査し、遺構および遺物包含層の状況について把握することができました。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上も重要な情報であり、今回の成果を復元整備や公開活用に活かしていく予定です。

また、環境整備事業につきましては、城内東大路の整備や史跡公園連絡橋の設計を行い、順調に整備事業を推進しております。

このように、秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会委員、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

令和2年3月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報2019

目 次

例言・凡例

I 調査の計画と実施状況.....	1
II 第112次調査報告	
1 調査経過.....	2
2 検出遺構と出土遺物.....	11
①第Ⅲ層面検出の遺構と遺物.....	11
②第Ⅳ層面検出の遺構と遺物.....	12
③第Ⅴ層面検出の遺構と遺物.....	18
3 基本層序および各層出土遺物.....	28
III 第113次調査報告	
1 調査経過.....	40
2 基本層序および各層出土遺物.....	40
IV 考察.....	43
V 秋田城跡環境整備事業.....	51
VI 秋田城跡保存活用整備事業.....	52
VII 秋田城跡現状変更.....	54
写真図版.....	55
報告書抄録.....	75
秋田城跡歴史資料館要項.....	76

例　　言

- 1 本書は、令和元年度に実施した秋田城跡第112・113次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は伊藤武士、松下秀博、児玉駿介、佐藤桃子が行った。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、伊藤・佐藤のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、佐藤が行い、秋田市文化振興課の神田和彦が補佐した。
- 5 墨書土器の解説については、三上喜孝氏（国立歴史民族博物館）の指導を得た。
- 6 本調査で得られた資料は、秋田市で保管している。
- 7 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

岡田茂弘、渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、高橋栄一、三上喜孝、五島昌也、齊藤慶史、野木雄大、小松正夫、藤木海、大橋泰夫、林部均、高橋学、武藤祐浩、五十嵐一治、新海和広、伊豆俊祐、村田晃一、根岸洋、文化庁文化財第二課、多賀城跡調査研究所、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

凡　　例

遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格、表面付着物の相違については、下記のスクリーントーンで表現した。

黒色処理 転用観 煤 漆
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
 - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
 - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
 - ・切り離し、粘土紐、叩き痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
 - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
 - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は1/4、石器は1/2、その他の遺物は1/3とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真的縮尺は瓦は約1/4、石器は約1/2、その他の遺物は約2/5とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X = -28,562,592、Y = -64,607,889である。



第1図 秋田城跡発掘調査位置図

I 調査の計画と実施状況

令和元年度の秋田城跡発掘調査は、第112・113次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）8,152,000円のうち国庫補助額4,076,000円（50%）、県費補助額815,000円（10%）、市費3,261,000円（40%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査予定期間
112次	焼山地区南西部	600m ² (181.50)	5月8日～9月30日
113次	大畠地区西部	6m ² (1.82)	10月23日～10月31日
計		606m ² (183.32)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、第112次調査は平成31年2月6日付け平30城歴第1540号で申請し、平成31年3月18日付け30受文庁第4号の724で許可された。第113次調査は令和元年9月12日付け平31城歴第821号で申請し、令和元年10月18日付け元受文庁第4号の967で許可された。

令和元年度の発掘調査は、焼山地区南西部と大畠地区西部の2箇所を調査対象とした。

第112次調査地は焼山地区南西部、外郭線に近接した城内南西部の地点にあたり、周辺の調査で9世紀第2四半期～第4四半期に造営された城内区画施設跡を検出している。今次調査地はこの区画施設内南半部にあたり、鍛冶等生産施設に伴う遺構が存在する可能性が高い場所であった。焼山地区的正報告書作成および環境整備計画を踏まえて、区画施設内の遺構の遺存状況や利用実態を確認すること目的に調査を実施した。

調査の結果、調査地全体で近世以降の歴跡や近現代の搅乱跡が多数検出され、古代の遺構面は大きく削平を受けている状況を確認した。遺存している古代遺構面は第Ⅲ層から第Ⅴ層の3面を確認し、城内施設を構成する鍛冶工房と考えられる堅穴状建物跡や焼土遺構などの遺構が検出された。全体として、掘立柱建物1棟、柱列1条、溝跡1条、堅穴状遺構1基、堅穴建物跡4軒、土坑7基、焼土遺構9基、不整形遺構1基が検出され、区画施設内の利用実態を把握することができた。

第113次調査地は大畠地区西部の政庁西側、正殿と推定西脇殿の中間にあたる。当該地は、令和2年度に建設を計画する秋田城跡史跡公園連絡橋建設事業の現状変更に伴い、事前調査を行い、地下遺構および遺物包含層の状況について把握する必要があり調査を実施した。調査の結果、古代の整地層を確認したが、遺構や遺物は検出されなかった。また調査地西側から斜面下部に向かって削平を受けている状況を確認し、調査地より西側には遺構が存在していないことを確認した。

令和元年8月24日に第112次調査の現地説明会を開催し、70名の参加があった。令和元年8月8日～9日に文化庁文化財第二課 斎藤文化財調査官の調査指導を受けた。令和2年1月17日に宮城県多賀城跡調査研究所 高橋所長の調査指導を受けた。

令和元年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査実施期間
112次	焼山地区南西部	564m ² (170.61)	5月8日～9月27日
113次	大畠地区西部	6m ² (1.82)	10月24日～10月30日
計		570m ² (172.43)	

II 第112次調査報告

1 調査経過

第112次調査は焼山地区南西部を対象に、令和元年5月8日から9月27日まで調査を実施した。調査面積は564m²である。

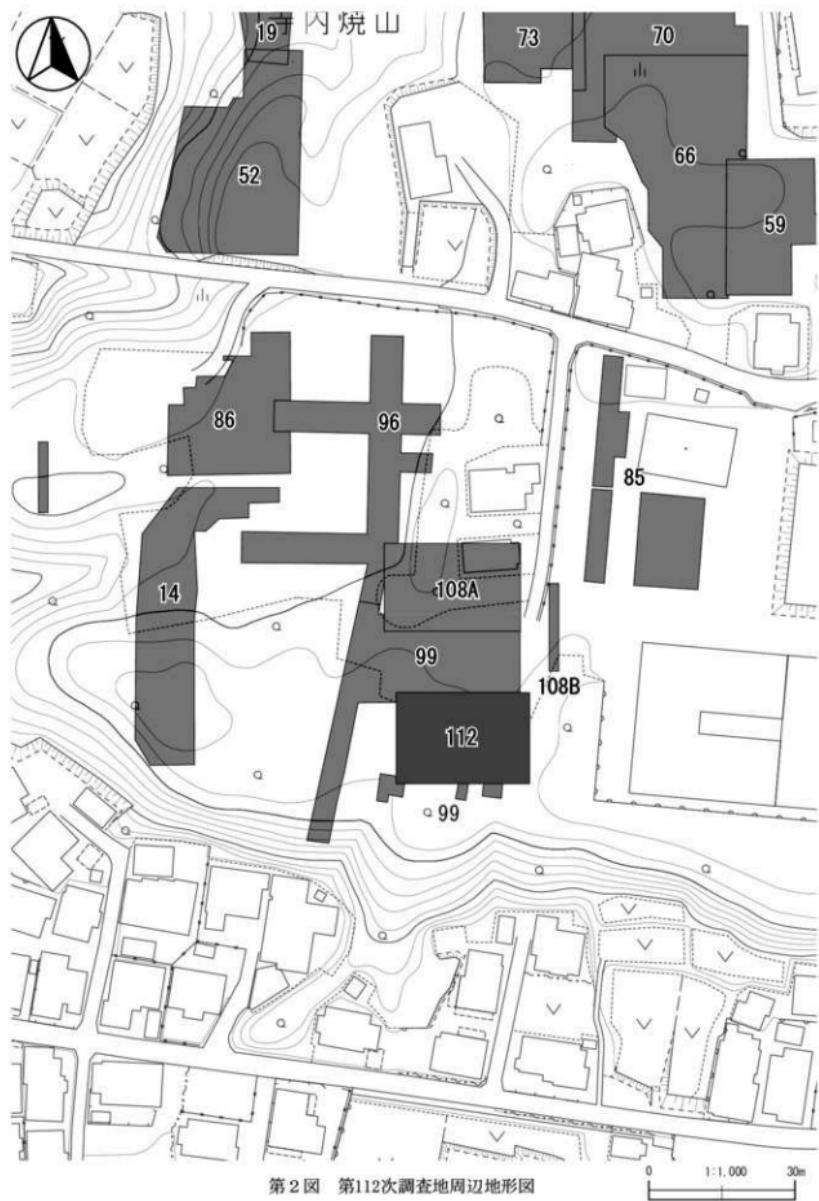
第112次調査地は焼山地区南西部にあたる。城内西半部の焼山地区においては、政庁西側の地区中央から外郭西門付近の北西部にかけて、8世紀後半から9世紀にかけて変遷する大規模建物群（倉庫群）が検出されている。その南西側、地区南西部周辺では、第85次調査（平成17年度）・第96次調査（平成22年度）・第99次調査（平成23年度）において、9世紀第2四半期以降に焼山地区南西部に造営された区画施設が検出された。削平により南西コーナー一部は確認できず、南東コーナー一部は未確認であるものの、区画の範囲・城内施設の規模は、最大で東西60m、南北約60mの方形となる可能性がある。区画施設内における遺構の構成および城内施設の性格については、施設の中心附近と考えられる第99次調査地北東部が近現代の削平を受けており、遺構の存在を確認することができなかつたものの、それ以外の箇所、また第108次調査（平成29年度）で焼土面を伴い工房と考えられる堅穴建物跡や、複数の焼土面などが検出され、鉄製品や鉄滓、フイゴ羽口が出土することから、鉄製品の生産に関わる施設の性格・機能の一端が把握された。また、硯や転用硯も出土していることから、実務官衙としての性格・機能を持つ可能性もある。このような区画施設内の実態解明を進める必要があった。今次調査地はこの区画施設内南半部にあたり、鍛冶等生産施設に伴う遺構が存在する可能性が高い場所である。今後、焼山地区的正報告書作成するためにも、この方形区画施設内の実態解明が必要あり、調査を実施した（第2図）。

今回調査を行った第112次調査地の旧地形は、北から南へ低くなる傾斜地であったと考えられるが、近世の畑地造成により、調査地北側を境に南側が一段低くなる段上地形となっていた。さらに昭和初期の浄水場整備に伴い、粘土等により平坦に埋土造成されていることが確認された。調査区については東西26m×南北19mに設定した。第99次調査地南東部分が北側に2m、99次調査拡張区北側が2m重複する形で設定した。また、99次で確認されていた柱列の広がりを把握するため、西側に拡張区を一か所設け、調査区西端から西へ0.5mの地点に、東西3m×南北2mの設定を行った。

調査方法は面的掘り下げを行い遺構の検出確認を行った後、検出遺構については、時期等遺構内容の把握が必要なものについて、保存に留意しながら半裁またはベルト等を残す形で遺構調査を行った。また下層遺構を追求する必要がある部分については、記録化後、部分的に掘り下げを行った。

調査は、まず調査地の樹木の伐採など整備を行った後、障害物の少なくなった状態で基準杭測量、調査区の設定を行った。調査区設定後、重機による表土・造成土の除去を行った（5月8日～5月10日）。その後、測量用やり方の設置と並行し、人手による表土・造成土の除去、第99次調査地点の埋め戻し土の除去を行った。造成土除去後、検出されていた搅乱穴の掘り下げを行った（5月10日～6月12日）。第II層を除去し、下部から畝や搅乱穴を検出した。第II層は耕作土であり、耕作がくり返されたことにより、下層の整地層や遺構が大きく削平を受けている状況を確認した。なおこの段階で、第III層の堆積は北側の一部と南西側の一部にしか見られず、削平等により調査区中央では第IV層面が、南側では第V層面が検出された（6月13日～7月4日）。

第II層除去後、畝・搅乱の掘り下げを行い、記録化を行った後、調査区全体の精査・遺構検査を行った。第III層部分からはSK2533土坑、SK2534土坑、SK2535土坑、第IV層部分からはSA2536柱列跡、SI2537堅穴建物跡、SK2538土坑、SK2539土坑、SK2540土坑、SK2541土坑、SX2542焼土遺構、SX2543焼土遺構、



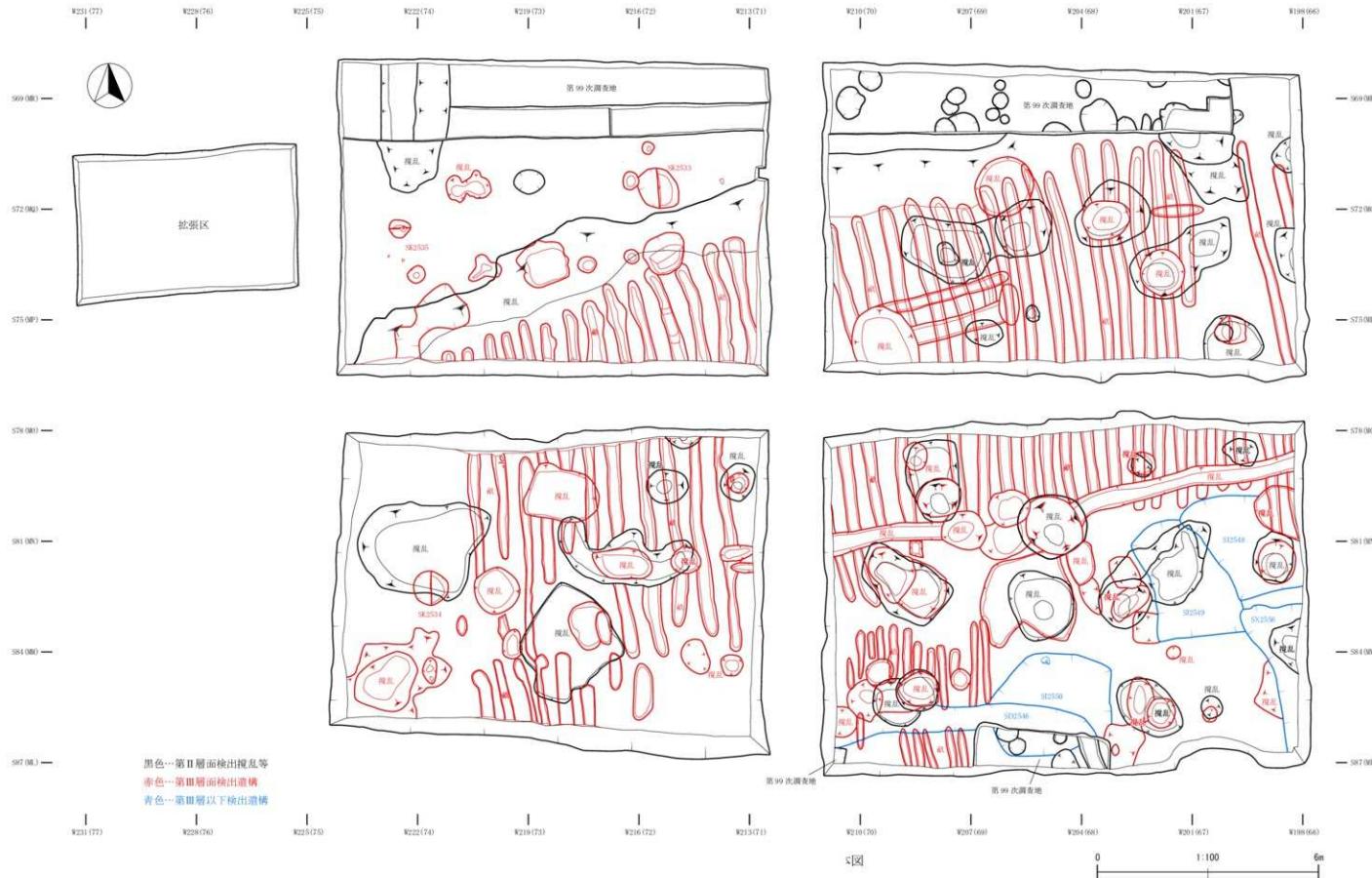
SX2544焼土遺構、第V層部分からはSB2545掘立柱建物跡、SD2546溝跡、SI2547竪穴状遺構、SI2548竪穴建物跡、SI2549竪穴建物跡、SI2550竪穴建物跡、SX2551焼土遺構、SX2552焼土遺構、SX2553焼土遺構、SX2554焼土遺構、SX2555焼土遺構、SX2556不整形遺構、SX2557焼土遺構を検出している。第IV層以下検出の遺構に関しては、耕作による搅乱の影響が著しく、上部は大きく削平を受け、本来の遺構形状はほとんど遺存していないと考えられた。

これらのうち第III層から検出されたSK2533土坑、SK2534土坑、SK2535土坑の半裁・完掘を行い、調査・記録化を行った。(7月8日～7月26日、第3図)。平行して拡張区を設定し、人手によって表土・造成土の除去を行った。この時点で、当該地点が大きく搅乱を受けており、遺構が遺存していない状況を確認した(7月22日～8月1日)。

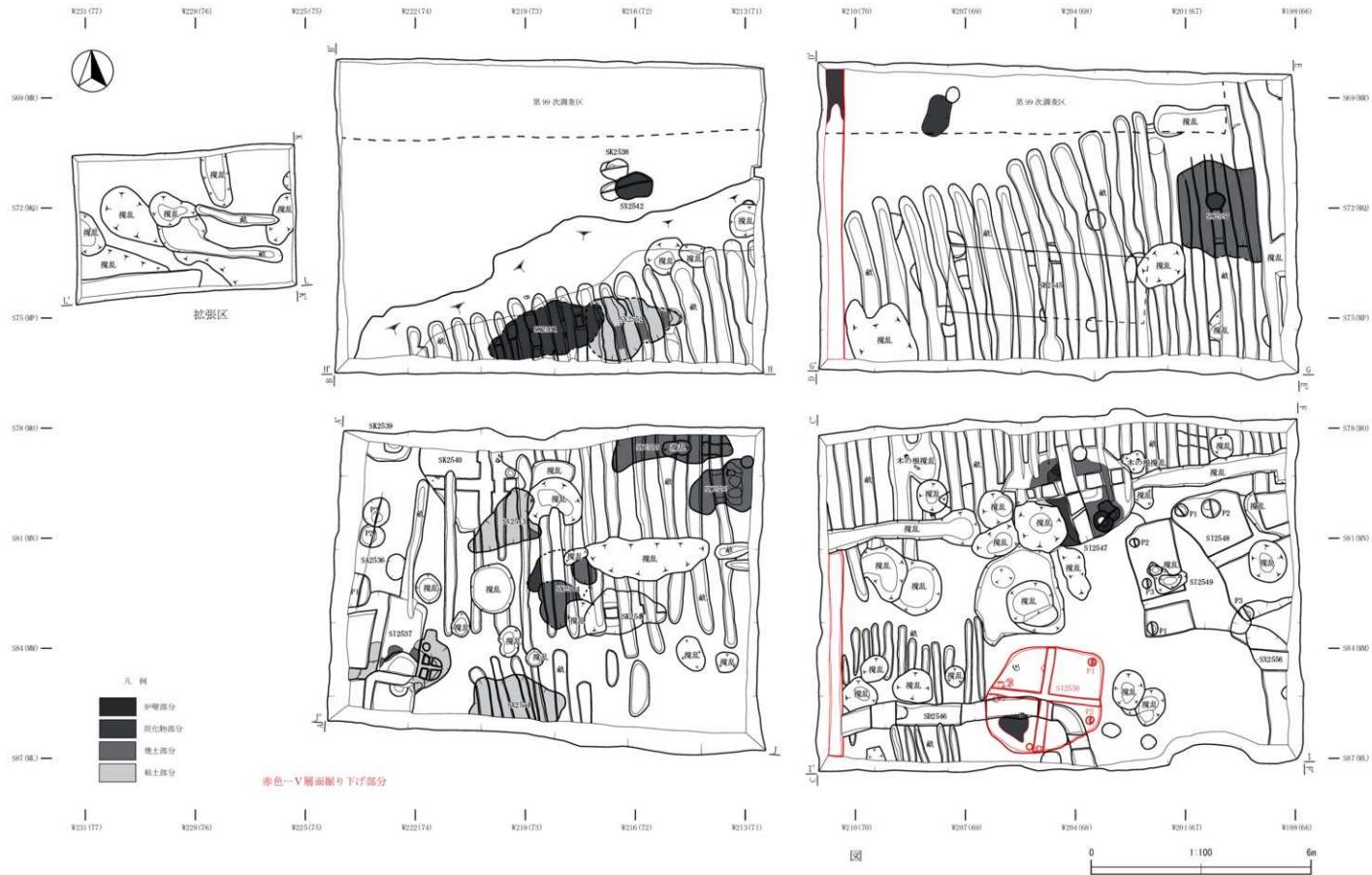
第III層を除去していくと、第III層の直下において、第IV層が検出され、精査を行った。SA2536柱列跡、SK2538土坑、SK2539土坑、SX2542焼土遺構、SX2557焼土遺構を検出した(7月29日～8月9日)。これまで検出されていたSI2537竪穴建物跡、SK2540土坑、SK2541土坑、SX2551焼土遺構、SB2545掘立柱建物、SD2546溝跡、SI2547竪穴状遺構、SI2548竪穴建物跡、SI2549竪穴建物跡、SI2550竪穴建物跡、SX2556不整形遺構、SA2536柱列、SK2538土坑、SK2539土坑、SX2543焼土遺構の掘り下げ・半裁と記録化を行った(8月19日～9月11日)。焼土遺構に関しては、この時点で当該遺構内外から鉄製品や鉄滓が出土していること、また炉として使用された痕跡が認められたことから、鍛冶等の生産活動に関わる遺構であることが考えられた。なお、SX2543焼土遺構に隣接し炭化物や鉄製品等が出土しているSK2540土坑は、掘り下げ・半裁した時の埋土は、鍛冶関係の鍛造剥片を検出するために保管した。調査終了後、これらの遺構の埋土をフリイにかけた結果、鍛造薄片等は確認できなかった。

調査区最終状況の全景写真的撮影、調査区壁ならびに中央ベルトの土層の記録化を行った(9月12日～19日)。全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い調査が終了した(9月23日～9月27日)。

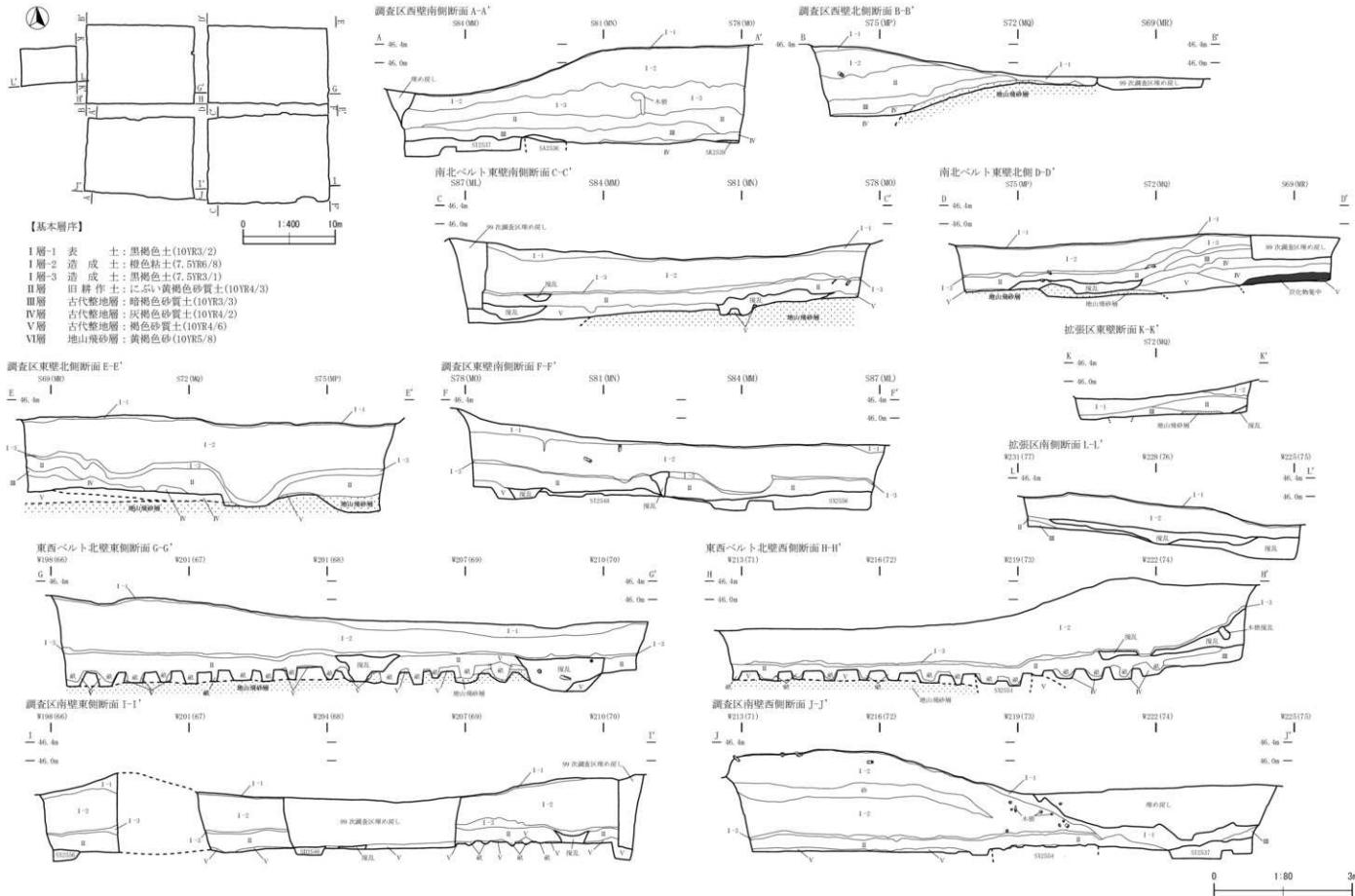
令和元年8月8日に文化庁文化財第二課斎藤文化財調査官の調査指導を受けた。令和元年8月24日に第112次調査の現地説明会を開催し、70名の参加があった。令和2年1月17日に宮城県多賀城跡調査研究所 高橋所長の調査指導を受けた。



第3図 第112次調査地第II層・第III層面検出遺構全体図



第4図 第112次調査地第IV層・第V層面検出遺構全体図



第5図 第112次調査地土層断面図

2 検出遺構と出土遺物

今次調査では、主な遺構として、掘立柱建物1棟、柱列1条、溝跡1条、竪穴建物跡4軒、竪穴状遺構1基、土坑7基、焼土遺構が9基、不整形遺構1基が検出された。各遺構は第III～V層面で検出されており、第II層は近世以降、第III層・第IV層・第V層は古代に整地された層であると考えられる。調査地全体で近世以降の耕作の痕跡が確認されており、古代の遺構面は大きく削平を受けていた。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第III層面検出の遺構と遺物

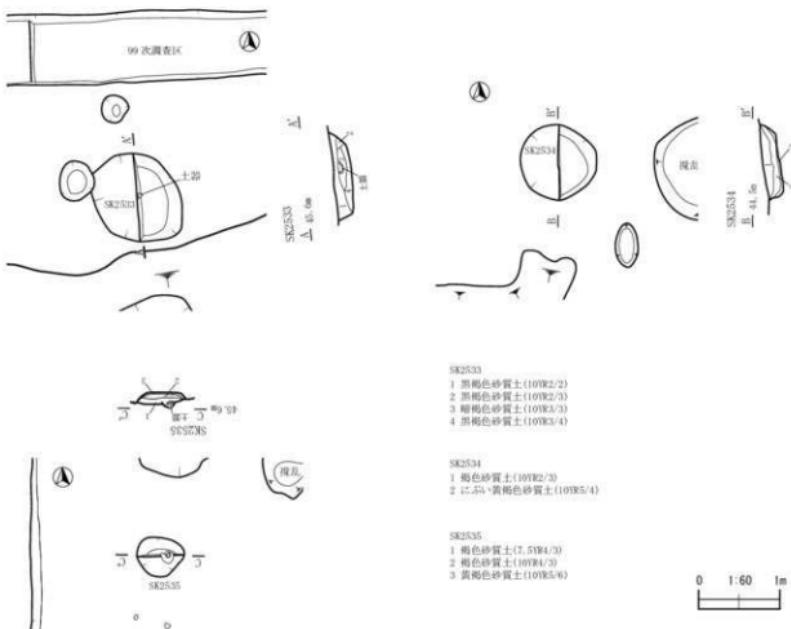
第III層面からは、土坑3基が検出された。

S K2533土坑（第6図、図版4）

調査区北西の第III層面で検出された。直径1m、深さ15cm。歪な円形を呈する。

S K2533土坑出土遺物（第7図、図版12）

赤褐色土器（第7図1・2）：1、2とともに埋土出土の壺である。1は底部破片であり、糸切り無調整である。2は体部破片である。ともに被熱している。



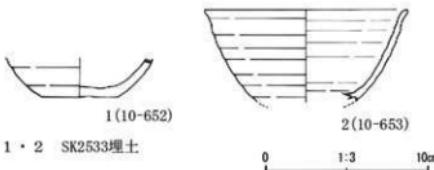
第6図 SK2533～SK2535土坑

S K2534土坑（第6図、図版4）

調査区南西の第III層面で検出された。直径70cm以上、深さ20cm。円形を呈する。

S K2534土坑出土遺物（第8図、図版12）

赤褐色土器（第8図1）：1は埋土出土の壺底部破片であり、糸切り無調整である。底部外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。



第7図 SK2533土坑出土遺物

S K2535土坑（第6図、図版4）

調査区北西の第III層面で検出された。長軸50cm、深さ10cm。歪な円形を呈する。

S K2535土坑出土遺物（第9図、図版12）

須恵器（第9図1）：1は埋土出土の長頸壺の頸部から体部にかけての破片である。体部中央から下半にかけてヘラケズリ調整、体部下半に手持ちヘラケズリ調整を施す。

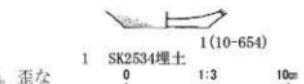
赤褐色土器（第9図2）：2は埋土出土の壺底部破片であり、糸切り無調整である。

②第IV層面検出の遺構と遺物

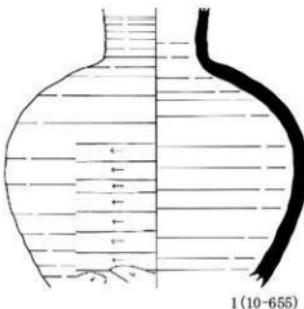
第IV層面からは、柱列1条、竪穴建物跡1軒、土坑4基、焼土遺構3基が確認されている。

S A2536柱列跡（第10図、図版4・5）

調査区南西の第IV層面で検出された南北方向の柱列である。南北2間以上で、調査区外の南西へ延びる。柱掘り方は直径50cm～80cmの歪な円形を呈し、深さ15cm、柱痕跡は不明である。柱筋が北で5°東に振れる。SI2537と重複し、これより新しい。



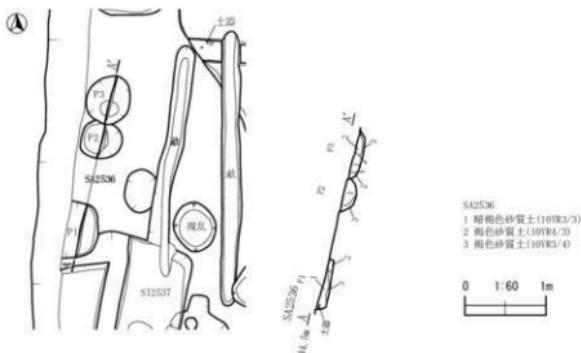
第8図 SK2534土坑出土遺物



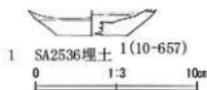
第9図 SK2535土坑出土遺物

S A2536柱列跡出土遺物（第11図、図版12）

赤褐色土器（第11図1）：1は埋土出土の壺底部破片であり、糸切り無調整である。体部外面に煤状炭化物が付着しており、被熱している。



第10図 SA2536柱跡



第11図 SA2536柱跡出土遺物

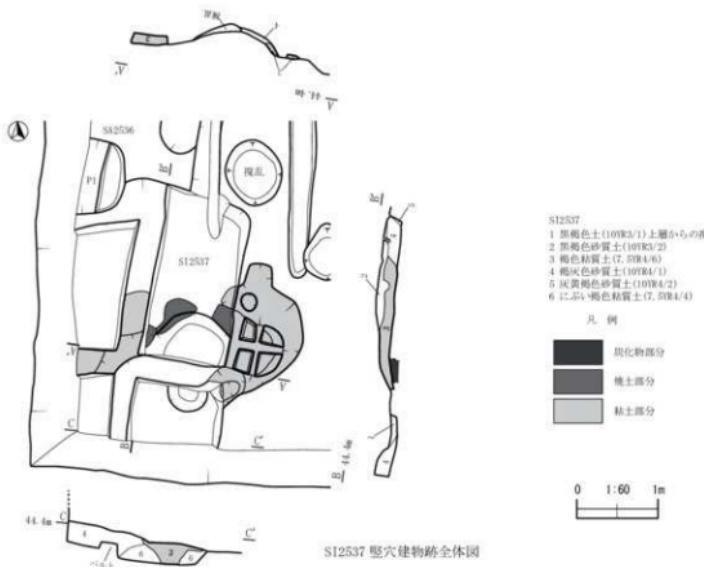
S 12537堅穴建物跡（第12図、図版5）

調査区南西の第IV層面で検出された。長軸3m以上。短軸2m以上。上部の大半は搅乱・削平を受けしており、遺残状態は悪い。東側にカマドが設置されている。方位は北で5° 東に振れる。住居壁高は15cmである。廃絶後、粘土で埋め立てた痕跡がある。SA2536と重複し、これより古い。

S 12537堅穴建物跡出土遺物（第13図、図版12）

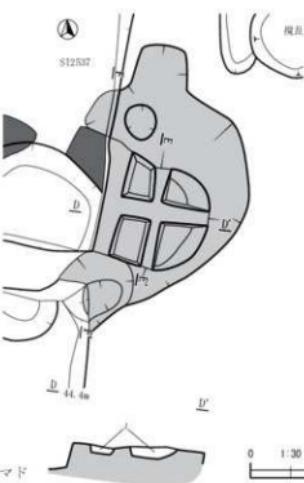
土師器（第13図1）：1は埋土出土の碗底部破片であり、糸切り無調整である。内面を横および斜め方向のミガキ調整後、黒色処理を施す。

赤褐色土器（第13図2～7）：2・5～7はカマド埋土出土、3・4は埋土出土である。2は壺口縁部破片であり、外面に判読不明の墨書がある。3・4はともに糸切り無調整の壺であり、体部内外面に煤状炭化物が付着しており、被熱している。5・6は糸切り無調整の壺であり、6は被熱している。7は三足土器の鉢である。体部内外面下端に手持ちケズリ調整、脚部付け根に指頭圧痕とナデ調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着しており、破損後被熱している。

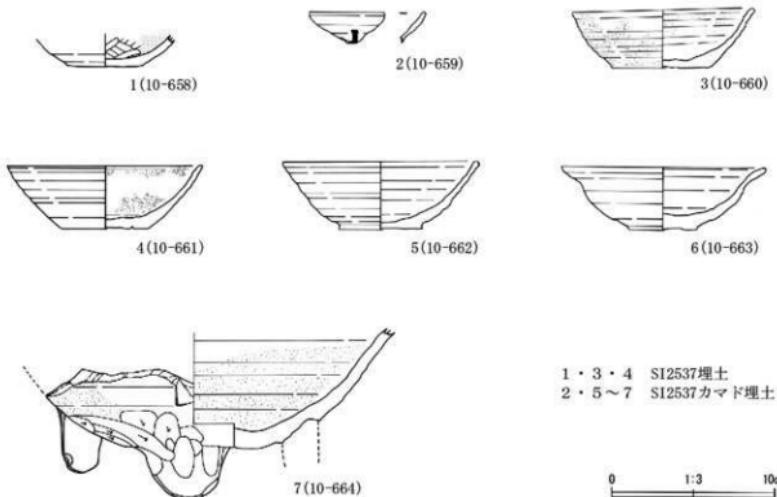


- SI2537 カマド**
- 暗褐色砂質土(10YR3/2)に褐色粘質土(7, 10YR4/6)ブロックが積じる。
 - 暗褐色砂質土(10YR3/3)
 - 褐色粘質土(7, 10YR4/6)カマド袖
 - 炭化物
 - 褐色砂質土(10YR4/6)

SI2537 壁穴建物跡 カマド



第12図 SI2537壁穴建物跡



第13図 SI2537堅穴建物跡出土遺物

S K2538土坑（第14図、図版5）

調査区北西の第IV層面で検出された。直径60cm、深さ18cm。歪な円形を呈する。SX2542と重複し、これより古い。

S K2539土坑（第14図、図版5）

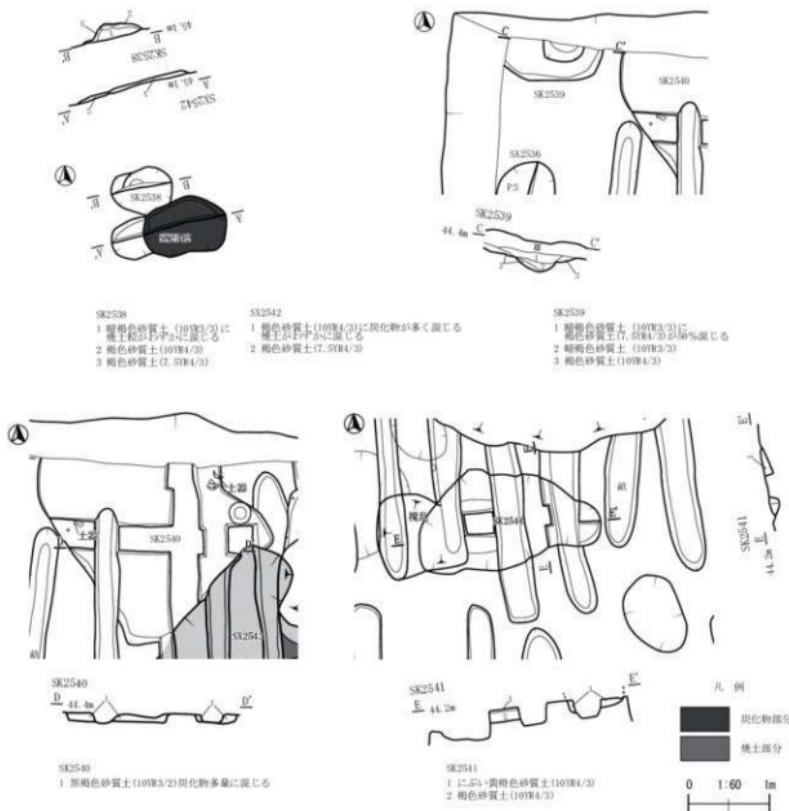
調査区南西の第IV層面で検出された。長軸1.2m以上。深さ20cm。歪な円形を呈する。

S K2539土坑出土遺物（第15図、図版13）

赤褐色土器（第15図1）：1は埋土出土の坏底部破片であり、糸切り無調整である。体部外面に煤状炭化物が付着している。

S K2540土坑（第14図、図版5）

調査区南西の第IV層面で検出された。長軸2.7m、短軸2.1m以上。深さ5cm～10cm。歪な梢円形を呈する。炭化物を多量に含む。SX2543と重複し、これより古い。鉄製品・鉄滓が出土している。

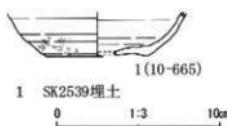


第14図 SK2538～SK2541土坑、SX2542焼土遺構

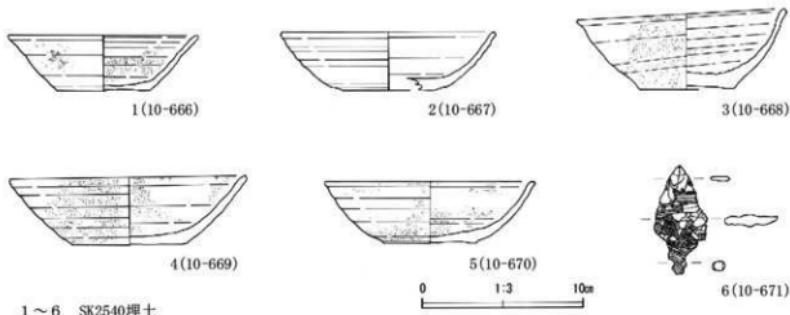
SK2540土坑出土遺物（第16図、図版13）

赤褐色土器（第16図1～5）：1～5は埋土出土の壺である。1は糸切り無調整であり、体部外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。2は糸切り無調整である。3は糸切り無調整であり、体部外面に煤状炭化物が付着している。4は糸切り無調整であり、全体に煤状炭化物が付着している。5は糸切り後外周部にナデ調整を施す。全体に煤状炭化物が付着しており、被熱している。

鉄製品（第16図6）：6は埋土出土の鉄鎌である。先端を除き草本類の茎を巻き付けた痕跡がある。



第15図 SK2539土坑出土遺物



第16図 SK2540土坑出土遺物

S K2541土坑（第14図、図版6）

調査区南西の第IV層面で検出された。長軸2.2m、短軸1.2m。深さ15cm。楕円形を呈する。

S K2541土坑出土遺物（第17図、図版13）

赤褐色土器（第17図1）：1は埋土出土の壺底部破片であり、糸切り無調整である。

S X2542焼土遺構（第14図、図版6）

調査区北西の第IV層面で検出された。長軸1.5m、短軸60cm、深さ18cm。歪な楕円形を呈し、焼土面を伴う。埋土に炭化物を多量に含み、焼土粒が確認された。SK2538と重複し、これより新しい。

S X2543焼土遺構（第18図、図版6）

調査区南西の第IV層面で検出された。長軸2.2m、短軸1m。深さ不明。不整形を呈する。しまりの強い粘質土によって粘土面が構築され、部分的に焼土面を伴う。SK2540と重複し、これより新しい。

S X2543焼土遺構出土遺物（第19図、図版13）

赤褐色土器（第19図1）：1は埋土出土の皿底部破片であり、糸切り無調整である。

S X2544焼土遺構（第18図、図版6）

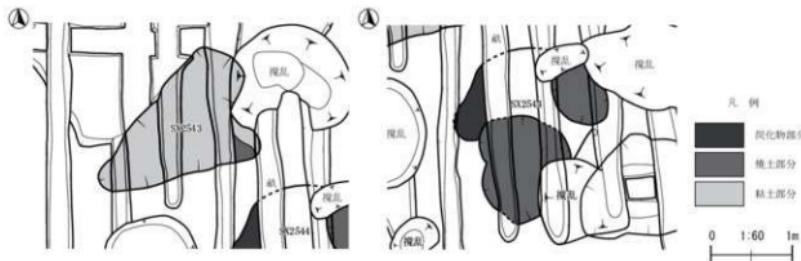
調査区南西の第IV層面で検出された。炭化物面・焼土面によって構成される。

S X2544焼土遺構出土遺物（第20図、図版13）

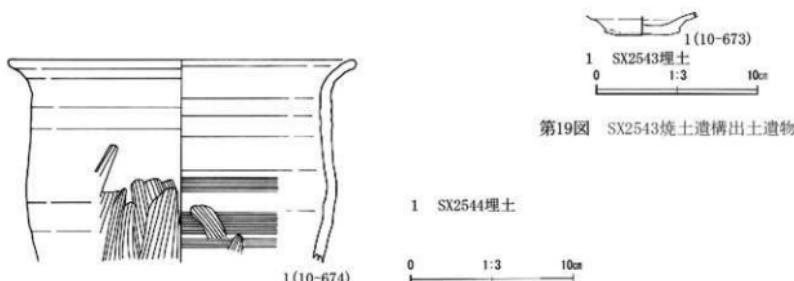
赤褐色土器（第20図1）：1は埋土出土の長胴甕の上半部である。体部外面に縦方向のハケ目調整、体部内面に横方向のカキ目調整後に縦方向のハケ目調整を施す。



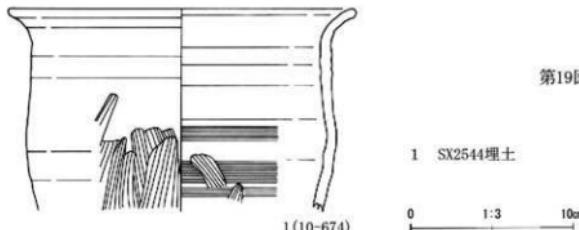
第17図 SK2541土坑出土遺物



第18図 SX2543・SX2544焼土遺構



第19図 SX2543焼土遺構出土遺物



第20図 SX2544焼土遺構出土遺物

③第V層面検出の遺構と遺物

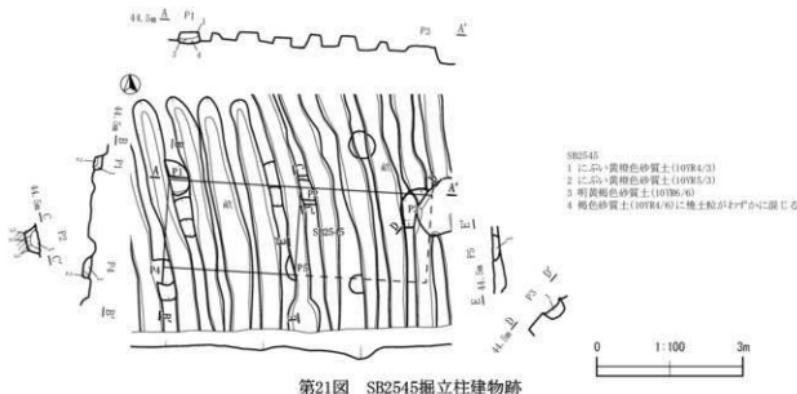
第V層面からは、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、竪穴建物跡3軒、竪穴状遺構1基、焼土遺構6基、不整形遺構1基が検出された。調査区の中央から南側にかけて主に検出されている。

S B2545掘立柱建物跡（第21図、図版6・7）

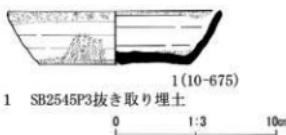
調査区北東の第V層面で検出された。桁行1間（1.8m）、梁間2間（2.7m+2.7m）の東西棟の掘立柱建物跡である。柱掘り方は50cm~80cmの円形であり、いずれも大きく削平されており、深さ10cm~15cm程しか遺存していない。建物方位は西で7° 北に振れる。

S B2545掘立柱建物跡出土遺物（第22図、図版13）

須恵器（第22図1）：1はP3柱掘り方の抜き取り埋土出土の坏である。底部回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。内外面に煤状炭化物が付着している。



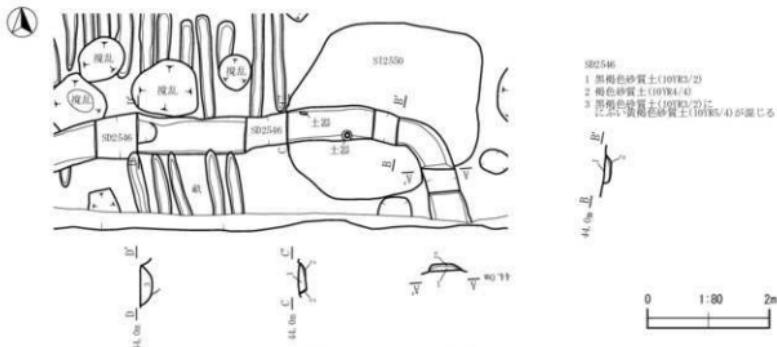
第21図 SB2545掘立柱建物跡



第22図 SB2545掘立柱建物跡出土遺物

SD2546溝跡 (図23図、図版7)

調査区南東の第V層面で検出された。長さ7m以上、幅40cm~60cm、深さ15cmの溝跡であり、南側の調査区外へと延びる。SI2550と重複し、これより新しい。第99次調査で検出されたSD2155、SD2156とつながる溝跡であると考えられる。



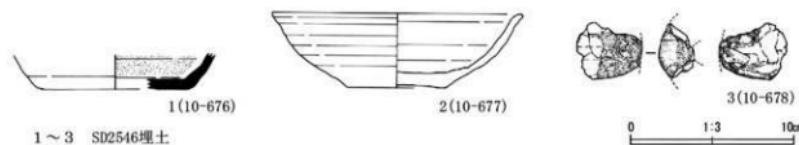
第23図 SD2546溝跡

S D2546溝跡出土遺物（第24図、図版13）

須恵器（第24図1）：1は埋土出土の壺である。底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。内面に煤状炭化物が付着し、被熱している。

赤褐色土器（第24図2）：2は埋土出土の壺である。糸切り無調整であり、被熱している。

土製品（第24図3）：3は埋土出土のフイゴ羽口の先端部破片である。



第24図 SD2546溝跡出土遺物

S I 2547竪穴状遺構（第25図、図版8）

調査区南東の第V層面で検出された。長軸3.5m、幅2.5m。深さ20cm～30cmの竪穴状遺構である。東壁は北で5°西に振れる。竪穴状に地面を掘り込んだ後、粘土を床や壁に貼り、壁の立ち上がり付近部に炉を造っていたことが確認された。焼土を伴う炉跡は2箇所で検出された。埋土は焼土、炭化物によって構成される。鉄滓が出土している。

S I 2547竪穴状遺構出土遺物（第26図、図版14）

須恵器（第26図1）：1は埋土出土の壺である。底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。

赤褐色土器（第26図2）：2は埋土出土の甕である。口縁部にナデ調整、体部内外面にハケ目調整を施す。

鉄製品（第26図3）：3は鉄鎌であり、先端部が欠損している。

S I 2548竪穴建物跡（第27図、図版8）

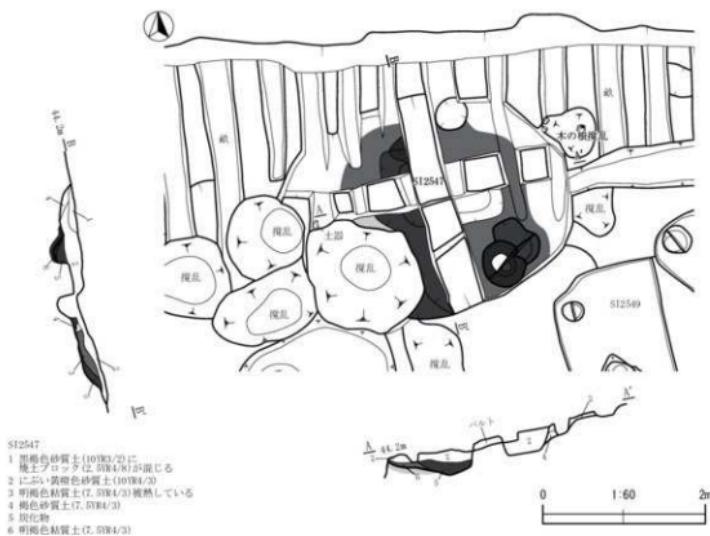
調査区南東の第V層面で検出された。長軸3.5m、短軸2m以上。削平により、住居壁高は4cm程しか遺存していない。西壁は北で30°西に振れる。SI2549と重複し、これより新しい。SX2556と重複し、これより古い。

S I 2549竪穴建物跡（第27図、図版8）

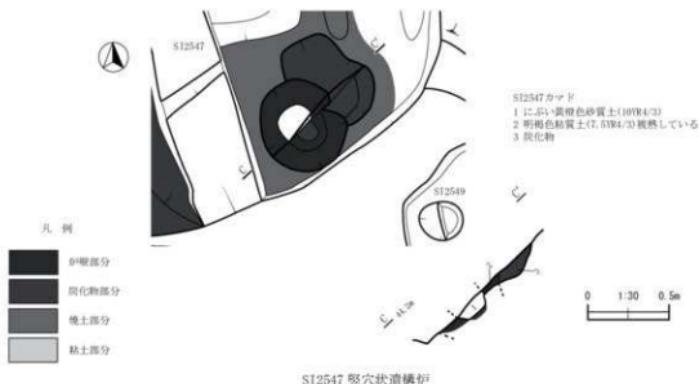
調査区南東の第V層面で検出された。長軸3.1m、短軸2.2m以上。住居壁高は4cm程しか遺存していない。西壁は北で13°西に振れる。埋土はしまりの強い粘質土によって構成される。SI2548と重複し、これより古い。埋土より赤褐色土器片が出土している。

S I 2550竪穴建物跡（第28図、図版9）

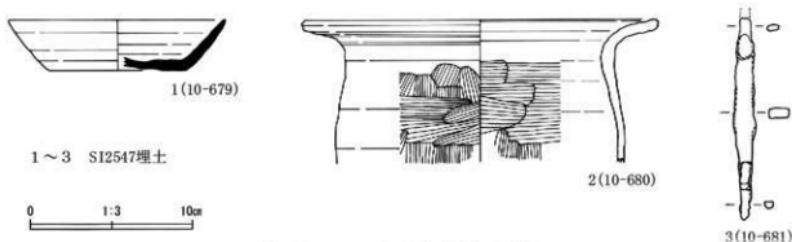
調査区南東区の第V層面で検出された。長軸3m、短軸3m。住居壁高は10cm程しか遺存していない。東壁は北で7°東に振れる。隅丸方形を呈する。床面の一部に炭化物集中面が確認された。SD2546と重複し、これより古い。



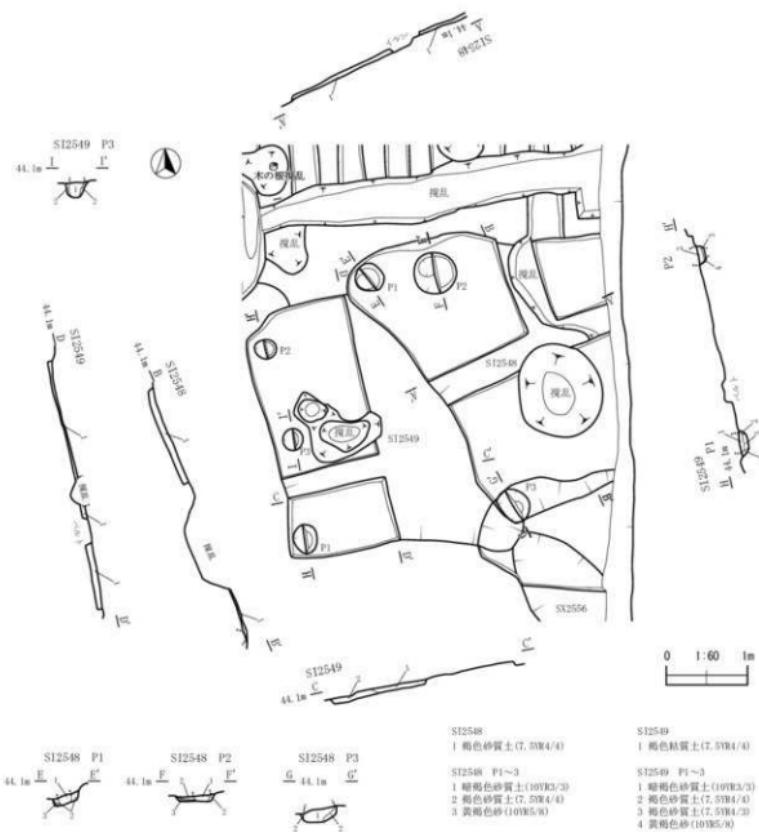
SI2547 壓穴狀遺構全圖



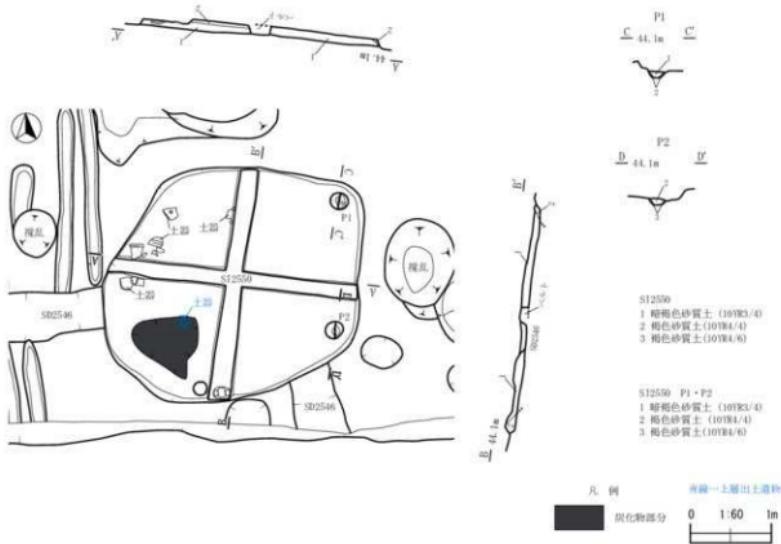
第25図 SI2547堅穴状遺構



第26図 SI2547堅穴状遺構出土遺物



第27図 SI2548・SI2549竪穴建物跡

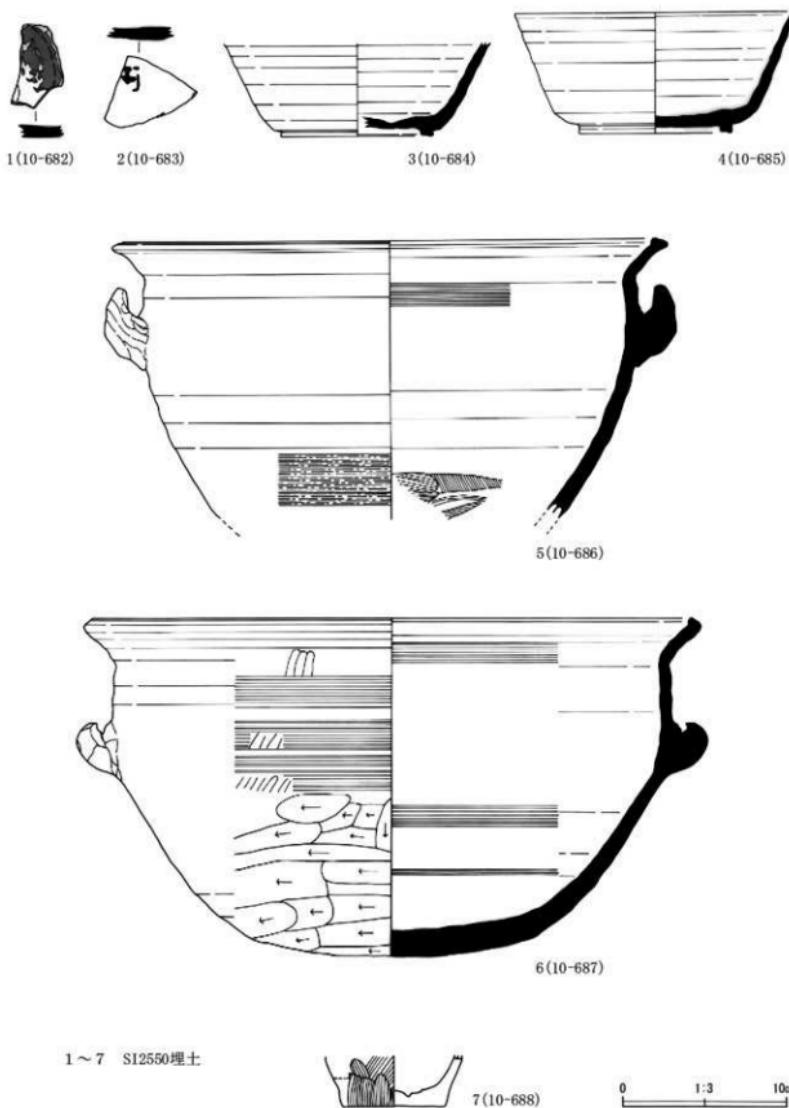


第28図 SI2550堅穴建物跡

S I 2550堅穴建物跡出土遺物（第29図、図版14・15）

須恵器（第29図1～6）：1、2はともに埋土出土の壺底部破片であり、底部回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。1は内面に漆膜が付着している。2は底部外面に「田」の墨書がある。3、4はともに埋土出土の台付壺であり、底部回転ヘラ切りである。いざれも台取り付け後、軽いナデ調整を施す。5、6はともに埋土出土の双耳鉢である。5は底部欠損しており、体部外面下端にケズリ調整、体部内面上半にカキ目調整、下端にハケ目調整を施す。6は外面に部分的に叩き痕跡を残し、口縁部にナデ調整、体部上半から下半にかけてカキ目調整、体部下半に手持ちケズリ調整を施す。内面は口縁部にナデ調整後、体部上半から底部にかけて部分的にカキ目調整を施す。

土師器（第29図7）：7は長胴甕の底部破片である。体部外面と底部にハケ目調整を施す。



第29図 S12550堅穴建物跡出土遺物

S X2551焼土遺構 (第30図、図版9)

調査区北西の第V層面で検出された。長軸3m、幅1.4m、深さ10cm~15cm。不整形を呈する。埋土は主に炭化物、微量の焼土によって構成される。遺構内外より鉄塊・鉄滓が出土している。SX2552と重複し、これより新しい。

S X2551焼土遺構出土遺物 (第31図、図版15)

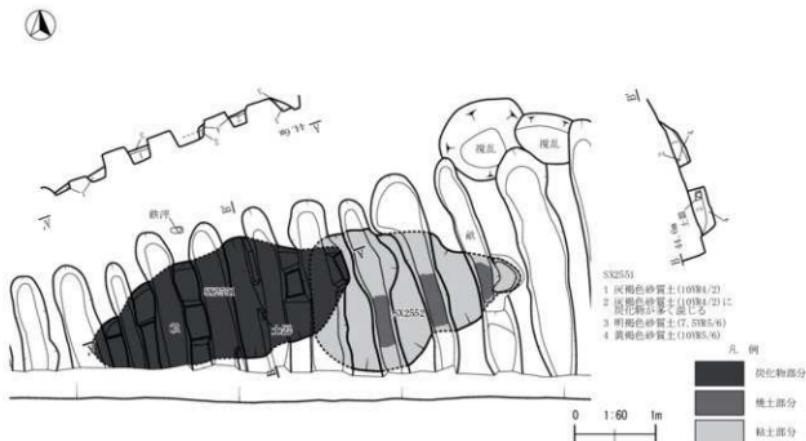
赤褐色土器 (第31図1~3) : 1~3は埋土出土の坏である。1は底部破片であり、糸切り無調整である。2は糸切無調整であり、内面と外面口縁部に煤状炭化物が付着した灯明皿である。3は口縁部から体部にかけての破片であり、体部内外面に煤状炭化物が付着している。体部外面に「木」の墨書がある。

土製品 (第31図4) : 4は埋土出土のフイゴ羽口の先端部破片である。

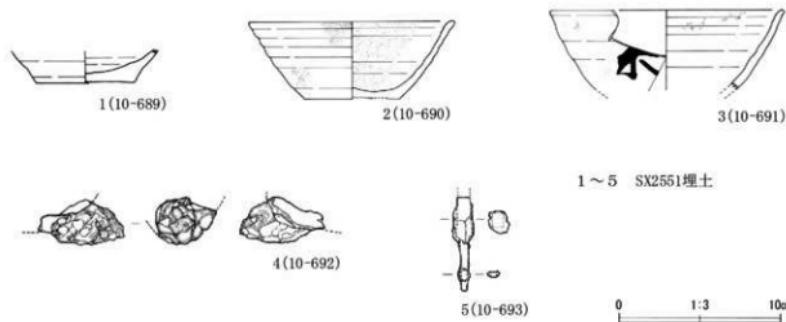
鉄製品 (第31図5) : 5は鉄鎌であり、上部が欠損している。

S X2552焼土遺構 (第30図、図版9)

調査区北西の第V層面で検出された。長軸3.2m以上、幅1.4m、深さ20cm。不整形を呈する。粘質土によって粘土面が構築され、部分的に焼土面を伴う。SX2551と重複し、これより古い。



第30図 SX2551・SX2552焼土遺構



第31図 SX2551焼土遺構出土遺物

S X2553焼土遺構（第32図、図版10）

調査区南西の第V層面で検出された。長軸1.2m以上、短軸1m、深さ不明。不整形を呈する。

S X2553焼土遺構出土遺物（第33図、図版15）

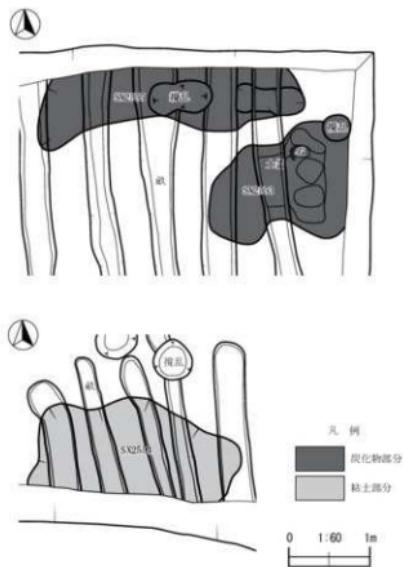
赤褐色土器（第33図1・2）：1は壊底部破片であり、糸切り無調整である。全体に煤状炭化物が付着している。2は長胴甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。ともに埋土出土である。

S X2554焼土遺構（第32図、図版10）

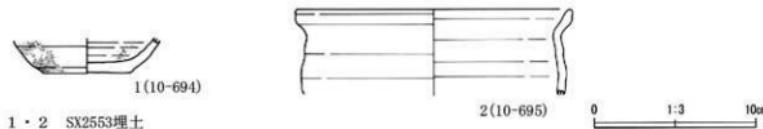
調査区南西の第V層面で検出された。長軸2.7m、短軸1m以上、深さ不明。不整形を呈する。しまりの強い粘質土によって粘土面が構築され、部分的に焼土面を伴う。

S X2555焼土遺構（第32図、図版10）

調査区南西の第V層面で検出された。長軸3.2m以上、短軸50cmの範囲で焼土面が検出される。削平により深さ不明。不整形を呈する。



第32図 SX2553～SX2555焼土遺構



第33図 SX2553焼土遺構出土遺物

S X2556不整形遺構（第34図、図版10）

調査区南東の第V層面で検出された。長軸3.9m以上、短軸60cm以上、深さ15cm。不整形を呈する。

S X2556不整形遺構出土遺物（第35図、図版15）

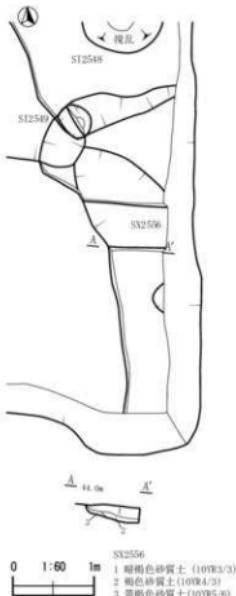
赤褐色土器（第35図1）：1は埋土出土の坏底部破片であり、糸切り無調整である。

S X2557焼土遺構（第36図、図版10）

調査区南東区の第V層面で検出された。直径2.5m、深さ不明。不整形を呈する。大部分を焼土面によって構成され、中央部には炭化物集中部がある。

S X2557焼土遺構出土遺物（第37図、図版15）

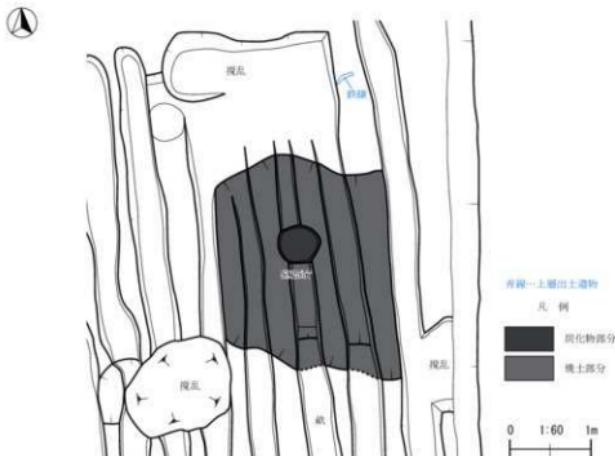
赤褐色土器（第37図1）：1は長胴甕の口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部ナデ調整、体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。



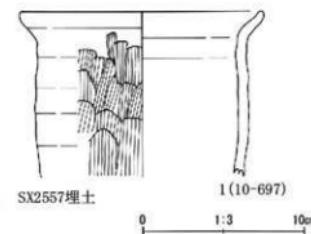
第34図 SX2556不整形遺構



第35図 SX2556不整形遺構出土遺物



第36図 SX2557 焼土遺構



第37図 SX2557 焼土遺構出土遺物

3 基本層序および各層出土遺物

基本層序（第5図）

第112次調査地は、旧地形は北から南へ低くなる傾斜地であったと考えられるが、近世の畠地造成により、現在は調査地北側を境に南側が一段低くなる段上地形となっていた。さらに昭和初期の浄水場整備に伴い、粘土等により平坦に埋土造成されていることが確認された。

第112次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：現代の整地に伴う造成土や耕作土。以下のように細分される。

第I-1層 現表土：黒褐色土（10YR3/2）。調査地全体を覆う。

第I-2層 造成土：浄水場および秋田市水道局社宅の整備と、解体撤去後の再整地に伴う造成土。

橙色粘土（7.5YR6/8）を主体とし、明褐色粘土（7.5YR5/8）、黄褐色砂（10YR5/8）が混じる現代遺物が混入する。

- 第I-3層 造成土**：黒褐色土（7.5YR3/1）。第I-2に付隨し、薄く堆積する。
- 第II層 旧耕作土**：近世から現代にかけての旧畑地造成土。にぶい黄橙色砂質土（10YR4/3）。調査地全体で検出される。攪乱や畝を検出している。
- 第III層 古代整地層**：暗褐色砂質土（10YR3/3）。最上層の古代の遺物包含層で、調査地北側の一帯高くなっている部分から南西側にかけてのみ堆積する。SK2533・SK2534・SK2535が検出されている。
- 第IV層 古代整地層**：灰褐色砂質土（10YR4/2）。調査地北から中央にかけて薄く堆積する。SK2538・SK2539・SK2540・SK2541、SX2542・SX2543・SX2544が検出され、掘削等によりSA2536・SI2537の検出面になっている。
- 第V層 古代整地層**：褐色砂質土（10YR4/6）。古代の整地層で、調査地全体に堆積する。SI2550が検出され、掘削等によりSB2545・SD2546・SI2547・SI2548・SI2549、SX2551・SX2552・SX2553・SX2554・SX2555・SX2556・SX2557の検出面となっている。
- 第VI層 地山飛砂層**：黄褐色砂（10YR5/8）。調査地全域で地山となっている。

各層出土遺物

第I層 出土遺物（第38図1～9、第43図1、図版16）

第38図、6～9はI層面検出の攪乱からの出土である。その他はI層内からの出土である。

須恵器（第38図1・2・6）：1は壊底部破片であり、糸切り無調整である。底部外面に「本」の墨書がある。2は長頸壺であり、頸部から体部上半の破片である。頸部外面に刻文がある。6は台付壊底部破片であり、底部回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。底部外面に判読不能の墨書がある。

赤褐色土器（第38図7）：7は壊底部破片であり、糸切り無調整である。底部が擬高台状に厚みを持つ。

磁器（第38図3）：3は中国産の蓮弁文碗の体部破片である。

陶器（第38図4）：4は肥前系陶器のハケ目紋碗の体部破片である。

土製品（第38図8）：土風炉の下部破片である。

石製品（第38図5）：凝灰岩製の砥石であり、4面を使用している。

銭貨（第38図9）：9は寛永通宝（古寛永、初鑄1636年）である。

瓦（第43図1）：平瓦で、凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が見られる。青灰色で焼成堅緻である。

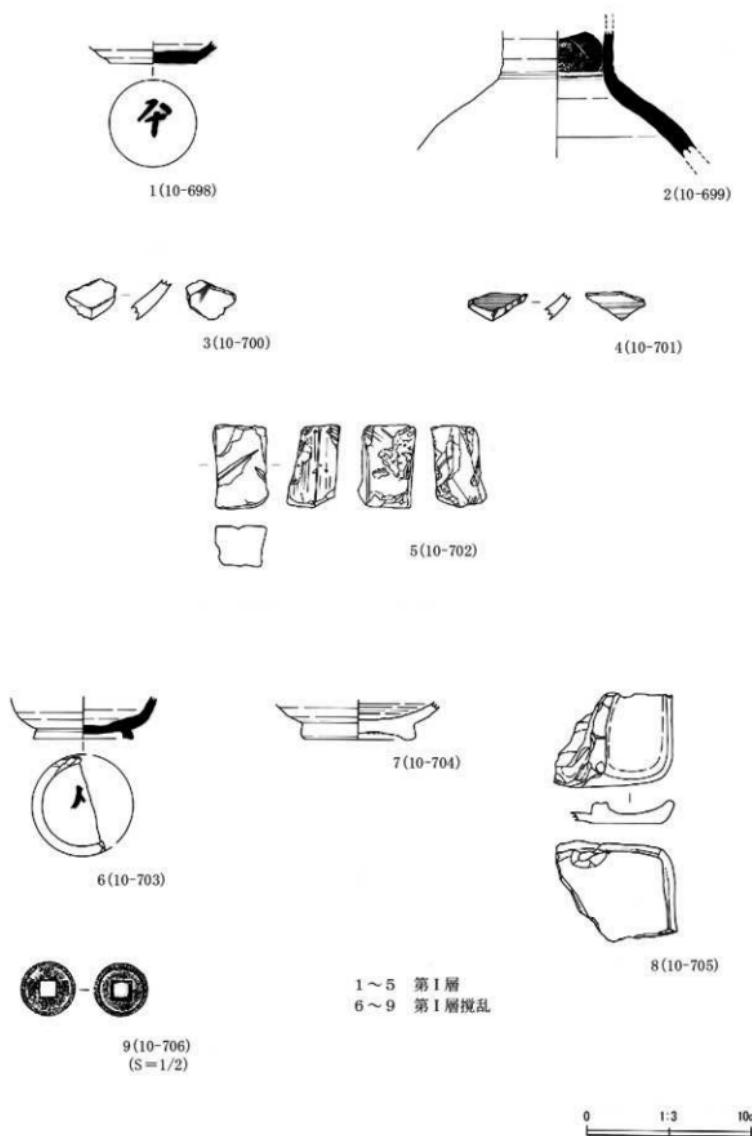
第II層 出土遺物（第39図1～17、図版17・18）

須恵器（第39図1～4）：1は壊底部破片であり、糸切り後、ケズリ調整を施す。内面底部を硯に転用している。2は壊の口縁から体部破片である。体部外面に「秋田郷」の墨書がある。3は蓋であり、二段の擬宝珠つまみを伴う。天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施す。4は円面硯の脚部破片であり、方形窓を持つ。外面に平行の刻文がある。

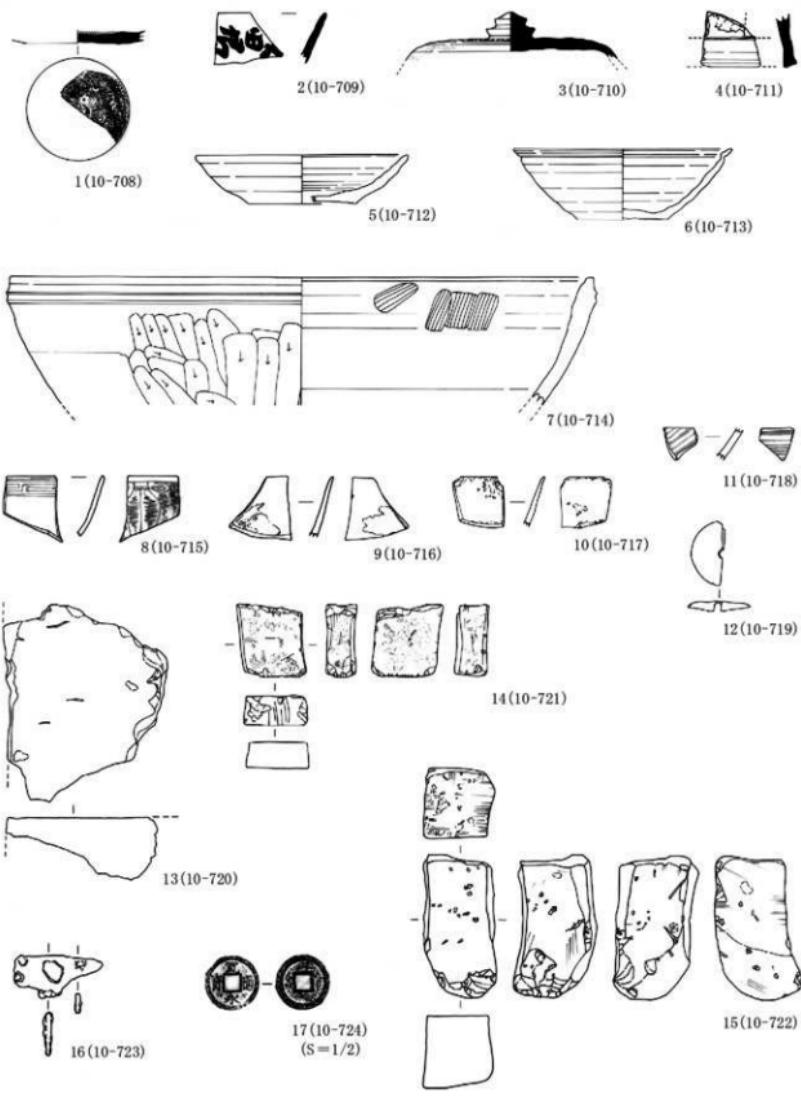
赤褐色土器（第39図5～7）：5、6は杯であり、ともに糸切り無調整である。7は鍋の口縁部から体部の破片であり、口縁部内面にハケ目調整、体部外面に縦・横方向の手持ちケズリ調整を施す。

磁器（第39図8）：8は肥前系磁器染付碗の口縁部破片である。内面に雷文を染付ける。

陶器（第39図9～11）：9は縄袖陶器の口縁部破片である。内外面に縄袖を施釉しており、釉が大きく剥落している。胎土および焼成は軟質である。10は縄袖陶器の口縁部破片である。内外面に縄袖を施釉し、口縁端部の釉が剥落している。胎土および焼成は軟質である。11は肥前系陶器碗の体部破片であ



第38図 第112次調査地第I層出土遺物



1~15 第II層

第39図 第112次調査地第II層出土遺物

る。ハケ目紋を施す。

土製品（第39図12・13）：12は紡錘車であり、半分欠損している。13は壇の破片である。

石製品（第39図14・15）：14、15とともに凝灰岩製の砥石であり、4面を使用している。

鉄製品（第39図16）：16は鎌であり、刃部が欠損している。

銭貨（第39図17）：17は寛永通宝（新寛永、初鑄1668年）である。

第三層 出土遺物（第40図1～11、図版18・19）

須恵器（第40図1～3）：1は壺であり、底部回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。2は蓋であり、天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施す。天井部内面に「郡」の墨書がある。3は大甕の体部破片であり、外面に縄目平行叩きを施す。内面には平行當て具痕が認められ、硯に転用している。

赤褐色土器（第40図4～8）：4～8はいずれも壺であり、糸切り無調整である。5・7は被熱している。8は体部内外面に煤状の炭化物が付着している。灯明皿である。

鉄製品（第40図9～11）：9は鉄鎌であり、先端部と茎部を欠損している。10は刀子であり、刃部と柄部を欠損している。11は不明鉄製品であり、二又と環状の端部を持つ。

瓦（第44図1）：丸瓦で、凸面はナデ調整を施し、凹面は布目圧痕が見られる。灰白色で焼成良好、軟質である。

第四層 出土遺物（第41図1～10、図版19・20）

赤褐色土器（第41図1～4）：1～4はいずれも壺であり、粗雑な糸切り無調整である。1、2は体部内外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。3は被熱している。

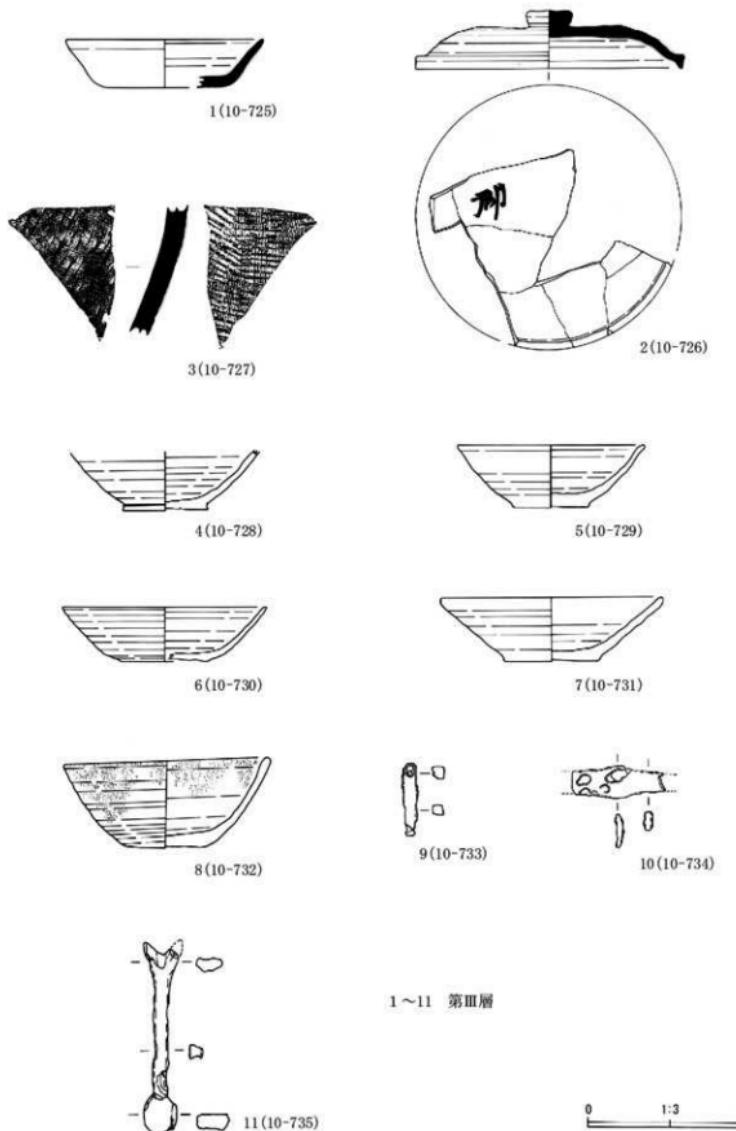
土製品（第41図5・6）：5はフイゴ羽口であり、先端部から体部の破片である。6は土錘であり、半分欠損している。

石製品（第41図7）：凝灰岩製の砥石であり、3面以上使用している。

鉄製品（第41図8～10）：8は鎌の先端部であり、茎部が欠損している。9は刀子であり、刃部が欠損している。10は完形の鎌である。

第五層 出土遺物（第42図1・2、図版20）

須恵器（第42図1・2）：1、2はともに壺で、底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。2は底部外面に「内々」の墨書がある。



第40図 第112次調査地第III層出土遺物



1(10-737)



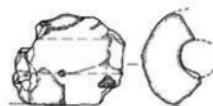
2(10-738)



3(10-739)



4(10-740)



5(10-741)



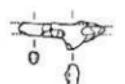
6(10-742)



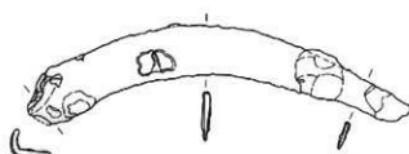
7(10-743)



8(10-744)



9(10-745)

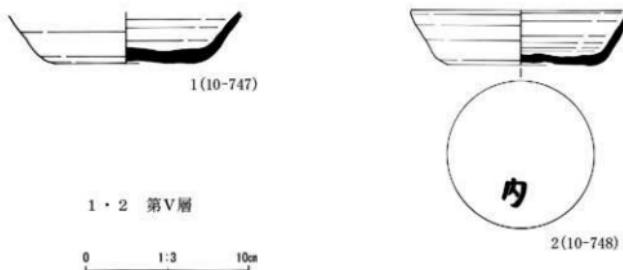


10(10-746)

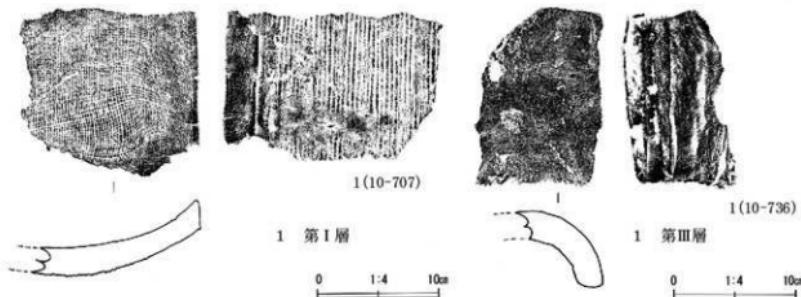
1~10 第IV層

0 1:3 10cm

第41図 第112次調査地第IV層出土遺物



第42図 第112次調査地第V層出土遺物



第43図 第112次調査地第I層出土瓦

第44図 第112次調査地第III層出土瓦

表3 第112次調査地検出遺構一覧

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SK2533	第6図	III	古代		直径1mの壺な円形。深さ15cm。
SK2534	第6図	III	古代		直径70cmの円形。深さ20cm。
SK2535	第6図	III	古代		直径50cmの壺な円形。深さ10cm。
SA2536	第10図	IV	古代	S12537→	直径50cm~80cmの壺な円形。深さ15cm。柱根跡未確認。柱筋が北で東に振れる。
SI2537	第12図	IV	古代	→SA2536	竪穴建物。長軸3m以上。短軸2m以上。南平により不整形。東側にカーブあり。真北方向。深さ15cm。北で 5° 東に振れる。
SK2538	第14図	IV	古代	→SX2542	直径60cmの壺な円形。深さ18cm。
SK2539	第14図	IV	古代		長軸1.2m以上の壺な円形。深さ20cm。
SK2540	第14図	IV	古代	→SX2543	長軸2.7m、短軸2.1m以上。深さ5cm~10cm。壺な円形。炭化物多量に含む。
SK2541	第14図	IV	古代		長軸2.2m、短軸1.2m。深さ15cm。橢円形。
SK2542	第14図	IV	古代	S12538→	長軸1.5m、短軸60cm。深さ5cm。壺な橢円形。
SX2543	第18図	IV	古代	SX2540→	長軸2.2m、短軸1m。深さ不明。不整形。
SX2544	第18図	IV	古代		直径50cmの壺な円形。後上面によって構成。
SB2545	第21図	V	古代		桁行1間(1.8m)、梁間2間(2.7m+2.7m)。東西棟。柱振り方は50cm~80cmの円形。深さ10cm~15cm。西で 7° 北に振れる。
SD2546	第23図	V	古代	S12550→	長さ3m以上。幅40cm~60cm。深さ15cm。
S12547	第25図	V	古代		竪穴建物。長軸3.5m、幅2.5m。深さ20cm~30cm。北で 5° 西に振れる。
S12548	第27図	V	古代	S12549→ →SX2556	竪穴建物。長軸3.5m、短軸2m以上。深さ4cm。北で 30° 西に振れる。
S12549	第27図	V	古代	→S12548	竪穴建物。長軸3.1m、短軸2.2m以上。深さ4cm。北で 13° 西に振れる。
S12550	第28図	V	古代	→SD2546	竪穴建物。長軸3m、短軸3m。深さ10cm。北で 7° 東に振れる。隅丸方形。
SX2551	第30図	V	古代	SX2552→	長軸3m、幅1.4m。深さ10cm~15cm。不整形。
SK2552	第30図	V	古代	→SK2551	長軸3.2m以上。幅1.4m。深さ20cm。不整形。
SK2553	第32図	V	古代		長軸1.2m以上。短軸1m。深さ不明。不整形。
SX2554	第32図	V	古代		長軸2.7m。短軸1m以上。深さ不明。不整形。
SX2555	第32図	V	古代		長軸3.2m以上。短軸50cm。深さ不明。不整形。
SX2556	第34図	V	古代	S12548→	長軸3.9m以上。短軸60cm以上。深さ15cm。不整形。
SX2557	第36図	V	古代		直径2.5m。不整形。深さ不明。

例1 SA0000→ 当該遺構がSA0000より新しい

例2 →SA0000 当該遺構がSA0000より古い

表4 第112次調査地出土遺物属性表(1)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地點 部位	タリ ット	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	
10-652	第7図1	図版12-1	SK2533埋土		赤褐色土器	壺		4.6		底部破片。底部回転糸切り無調整。 三次被熱あり。	
10-653	第7図2	図版12-2	SK2533埋土		赤褐色土器	壺	12.6			体部破片。二次被熱あり。	
10-654	第8図1	図版12-3	SK2534埋土		赤褐色土器	壺		5.2		底部破片。底部回転糸切り無調整。 底部外側に煤状炭化物付着。二次被熱あり。	
10-655	第9図1	図版12-4	SK2535埋土		須恵器	長頸壺				体部中央から下平にかけてヘラケズ リ調整。体部下平に手持ちヘラケズ リ調整。	
10-656	第9図2	図版12-5	SK2535埋土		赤褐色土器	壺		4.8		底部破片。底部回転糸切り無調整。	
10-657	第11図1	図版12-6	SK2536埋土		赤褐色土器	壺		4.4		底部破片。底部回転糸切り無調整。 底部内外面に煤状炭化物付着。被熱 している。	
10-658	第12図1	図版12-7	SK2537埋土		土器	碗		4.7		底部破片。底部回転糸切り無調整。 内面を構ね上げ斜め方向のミガク調 整。黒色鉄。	
10-659	第12図2	図版12-8	S12537カマ ド埋土		赤褐色土器	壺				口縁部破片。外面に判読不明の墨書 あり。	
10-660	第13図3	図版12-9	S12537埋土		赤褐色土器	壺	11.2	6.2	3.5	底部回転糸切り無調整。体部内外に 煤状炭化物付着。二次の被熱あり。	
10-661	第13図4	図版12-10	S12537埋土		赤褐色土器	壺		12.0	5.2	底部回転糸切り無調整。体部内外に 煤状炭化物付着。二次被熱あり。	
10-662	第13図5	図版12-11	S12537カマ ド埋土		赤褐色土器	壺		12.2	5.2	4.2	底部回転糸切り無調整。
10-663	第13図6	図版12-12	S12537カマ ド埋土		赤褐色土器	壺		12.6	4.2	底部回転糸切り無調整。二次被熱 あり。	
10-664	第13図7	図版12-13	S12537カマ ド埋土		赤褐色土器	三足器・鉢				体部内外面に煤状炭化物付着。体部 内外面下端に持ちケズリ調整。脚 部付け根に指認痕とナデ調整。	
10-665	第15図1	図版13-1	SK2539埋土		赤褐色土器	壺		6.2	2.6	底部破片。底部回転糸切り無調整。	
10-666	第16図1	図版13-2	SK2540埋土		赤褐色土器	壺		11.6	5.6	3.4	底部外側に煤状炭化物付着。
10-667	第16図2	図版13-3	SK2540埋土		赤褐色土器	壺		13.2	5.6	3.6	底部回転糸切り無調整。
10-668	第16図3	図版13-4	SK2540埋土		赤褐色土器	壺		13.0	5.9	4.4	底部回転糸切り無調整。体部内外面 に煤状炭化物付着。
10-669	第16図4	図版13-5	SK2540埋土		赤褐色土器	壺		14.5	7.0	4.2	底部回転糸切り無調整。全体に煤状 炭化物付着。二次被熱あり。
10-670	第16図5	図版13-6	SK2540埋土		赤褐色土器	壺		13.0	5.8	3.8	底部回転糸切り無調整。全体に煤状炭化物付着。二次被熱あり。
10-671	第16図6	図版13-7	SK2540埋土		鉄製品	鍔				先端を除き草木棒の茎を巻きつけた 痕跡残る。	
10-672	第17図1	図版13-8	SK2541埋土		赤褐色土器	壺			5.4	底部破片。底部回転糸切り無調整。	
10-673	第19図1	図版13-9	SK2543埋土		赤褐色土器	皿		4.7		底部破片。底部回転糸切り無調整。	
10-674	第20図1	図版13-10	SK2544埋土		赤褐色土器	長颈甌	21.2			体部外側に縦筋に向のハケ目調査。体 部内側に横筋方向のカキ目調査。縦 筋方向のカキ目調査。	
10-675	第22図1	図版13-11	SB2545P3埋 土		須恵器	壺	15.2	9.3	3.3	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調 整。内外面に煤状炭化物付着。	
10-676	第24図1	図版13-12	SD2546埋土		須恵器	壺			9.6	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調 整。内外面に煤状炭化物付着。二次被 熱あり。	
10-677	第24図2	図版13-13	SD2546埋土		赤褐色土器	壺	15.6	6.1	4.6	底部回転ヘラ切り無調整。被熱して いる。二次被熱あり。	
10-678	第24図3	図版13-14	SD2546埋土		土製品	トイゴ羽口				先端部破片。	
10-679	第26図1	図版14-1	S12547埋土		須恵器	壺	13.4	8.4	3.2	底部回転ヘラ切り後。軽いナデ調 整。	
10-680	第26図2	図版14-2	S12547埋土		赤褐色土器	甌		21.8		口縁部にナデ調整。体部内外面にハ ケ目調査。	
10-681	第26図3	図版14-3	S12547埋土		鉄製品	鍔				先端部欠損。	
10-682	第29図1	図版14-4	S12550埋土		須恵器	壺				底部破片。底部回転ヘラ切り後、軽 いナデ調査。内面に詰跡付着。	
10-683	第29図2	図版14-5	S12550埋土		須恵器	壺				底部破片。底部回転ヘラ切り後、ナ デ調整。底部外側に墨書き「田」。	

表5 第112次調査地出土遺物属性表（2）

遺物No.	図版番号	写真図版	出土位置 層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
10-684	第2953	図版14-6	S12550埋土		須恵器	台付环		9.4		底部回転へラ切り。台取り付け後、軽いナメ調整。
10-685	第2954	図版14-7	S12550埋土		須恵器	台付环	17.4	9.4	7.5	底部回転へラ切り。台取り付け後、ナメ調整。
10-686	第2955	図版14-8	S12550埋土		須恵器	双耳鉢	33.2			底部欠損部。体部外面下端にケズリ調整。体部内面上半にカキ目調査。下端にハケ目調査。
10-687	第2956	図版15-1	S12550埋土		須恵器	双耳鉢	37.0	17.7	20.8	外面に三分割に叩き目痕を残し口縁部ナメ調整。体部下半から下半にかけてカキ目調査。体部下半ナメ打ちケズリ調整。内外面口縁部に煤状炭化物付着後、体部上半から底部にかけて三分割にカキ目調査。
10-688	第2957	図版15-2	S12550埋土		土師器	長柄甕		6.2		底部破片。体部外面と底部にハケ目調査。
10-689	第31回	図版15-3	S32551埋土		赤褐色土器	环		6.0		底部破片。底部回転へラ切り無調整。
10-690	第31回2	図版15-4	S32551埋土		赤褐色土器	环	12.8	6.0	4.8	底部回転へラ切り無調整。内外面と口縁部に煤状炭化物付着。灯明皿。
10-691	第31回3	図版15-5	S32551埋土		赤褐色土器	环	14.4			口縁部から体部破片。体部外面上に煤状炭化物付着。体部外面に「木」墨書き。
10-692	第31回4	図版15-6	S32551埋土		土製品	糞				先端部破片。
10-693	第31回5	図版15-7	S32551埋土		鉄製品	鐵				上部破片。
10-694	第33回1	図版15-8	S32553埋土		赤褐色土器	环		5.2		底部破片。底部回転へラ切り無調整。全体に煤状炭化物付着。
10-695	第33回2	図版15-9	S32553埋土		赤褐色土器	長柄甕		17.0		口縁部から体部破片。
10-696	第35回1	図版15-10	S32556埋土		赤褐色土器	环		4.4		底部破片。底部回転へラ切り無調整。
10-697	第37回1	図版15-11	S32557埋土		赤褐色土器	長柄甕	15.0			口縁部から体部破片。口縁部ナメ調整。体部外面に黒向火のハケ目調査。
10-698	第38回1	図版16-1	I層	M0~M2 66~69	須恵器	环		5.5		底部破片。底部回転へラ切り無調整。底部外面に「木」墨書き。
10-699	第38回2	図版16-2	I層	M0~M2 66~69	須恵器	長頸甕				頭部から体部上半の破片。頭部外面墨文有り。
10-700	第38回3	図版16-3	I層	M1~M2 70~74	磁器	青磁碗				体部破片。中国産文竈碗。
10-701	第38回4	図版16-4	I層	M1~M2 75~76	陶器	唐津碗				体部破片。肥前系陶器。ハケ目紋。肥前期～IV期。
10-702	第38回5	図版16-5	I層	M1~M2 75~76	石製品	砾石				4面削用。粗灰岩質。
10-703	第38回6	図版16-6	I層混乱	M0/73	須恵器	台付环		6.2		底部破片。底部回転へラ切り後、ナメ調整。底部外面に利尻不斬の墨書き。
10-704	第38回7	図版16-7	I層混乱	M0~M2 66~69	赤褐色土器	环		7.1		底部破片。底部回転へラ切り無調整。底部表面高台状に厚み持つ。
10-705	第38回8	図版16-8	I層混乱	M1~M2 70~74	土製品	土風炉				下部破片。
10-706	第38回9	図版16-9	I層混乱	M1~M2 70~74	錢貨	寛永通宝				古寛永。初鋳1636年。外縁外径22mm、内縁内径6mm、外縁厚1mm、重量3g。銭文により元文不鮮明。凸面に鑄印の印記有り。凹面は布打压痕。青灰色。鍍金成形。
10-707	第43回1	図版16-10	I層	M0~M2 70~74	瓦	平瓦				底部破片。底部回転後。ケズリ調整。内外面底部破片に利用。
10-708	第39回1	図版17-1	II層	MP68	須恵器	环		6.3		口縁部から体部破片。体部外面に「秋田郡」墨書き。
10-709	第39回2	図版17-2	II層	MP68	須恵器	环				二段の擬宝珠つまみ。天井部へラ切り後、ケズリ調整。
10-710	第39回3	図版17-3	II層	MP68	須恵器	蓋				脚部破片。方形窓あり。外面上平行の刻字有り。
10-711	第39回4	図版17-4	II層	MP~ M068	須恵器	円面鏡			3.1	底部糸切り無調整。
10-712	第39回5	図版17-5	II層	MP~ M066	赤褐色土器	环	13.2	6.7		口縁部から肥前系繩目。口縁部内面にハケ目調査。体部内面裏・横方向の手持ちケズリ調整。
10-713	第39回6	図版17-6	II層	M073	赤褐色土器	环	13.6	5.6	4.4	染付。肥前系繩目。口縁部内面に蜜文を染付ける。
10-714	第39回7	図版17-7	II層	M073	赤褐色土器	鍋	36.4			口縁部から体部破片。口縁部内面にハケ目調査。体部内面裏・横方向の手持ちケズリ調整。
10-715	第39回8	図版17-8	II層	M070	磁器	瓶				染付。肥前系繩目。口縁部内面に蜜文を染付ける。
10-716	第39回9	図版17-9	II層	M0~ M066	縄緯陶器	瓶				口縁部破片。内外面に縄緯施釉。釉が大きく剥落している。胎土および成形部質。
10-717	第39回10	図版17-10	II層	M0~ M066	縄緯陶器	瓶				口縁部破片。内外面に縄緯施釉。胎土および成形部質。
10-718	第39回11	図版17-11	II層	M066	陶器	瓶				体部破片。肥前系陶器。ハケ目紋。肥前III～IV期。

表6 第112次調査地出土遺物属性表(3)

遺物No.	図版番号	写真図版	出土位置 層位	タリ ット	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
10-719	第39612	図版17-12	B層	M7.72	土製品	筋縫車				半分欠損。
10-720	第39613	図版17-13	B層	M9~M9.69	土製品	埴				
10-721	第39614	図版18-1	B層	M9~M9.74	石製品	砾石				4面使用。凝灰岩製。
10-722	第39615	図版18-2	B層	M9~M9.74	石製品	砾石				4面使用。凝灰岩製。
10-723	第39616	図版18-3	B層	MN66	鉄製品	鍊				鍊。刃部欠損。 新甕水。初鉄1668年。外縁外径25cm、内郭径6mm、外縁厚1mm、重量1g
10-724	第39617	図版18-4	B層	MP71	銭貨	甕永通宝				
10-725	第40411	図版18-5	B層	MQ71	須恵器	壺	12.2	7.0	3.0	底部回転ヘタ切り後、ナガ調整。 天井部ヘタ切り後、ケズリ調整。天井部内面に「都」墨書き。
10-726	第40422	図版18-6	B層	MQ72	須恵器	蓋				
10-727	第40433	図版18-7	B層	MQ74	須恵器	大甕				体部破片。外面調目平行叩き。内面を鏡に転用のため、当て具痕不明。
10-728	第40444	図版18-8	B層	MN73 * 74	赤褐色土器	壺		5.3		底部回転系切り無調整。角切り粗錐。
10-729	第40455	図版18-9	B層	MQ71	赤褐色土器	壺	11.4	4.6	3.9	底部回転系切り無調整。
10-730	第40466	図版18-10	B層	MN73 * 74	赤褐色土器	壺	12.6	5.4	3.4	底部回転系切り無調整。
10-731	第40477	図版19-1	B層	MQ71	赤褐色土器	壺	13.6	6.0	4.0	底部回転系切り無調整。二次被熱あり。
10-732	第40488	図版19-2	B層	MQG8	赤褐色土器	壺	12.7	5.1	5.4	底部回転系切り無調整。体部内外面に煤状の炭化物付着。灯明頭。
10-733	第40499	図版19-3	B層	MQ71	鉄製品	撫				鉄鑄。生地上茎部欠損。
10-734	第405010	図版19-4	B層	MN73 * 74	鉄製品	刀子				刃部と柄側欠損。
10-735	第404111	図版19-5	B層	MN73 * 74	鉄製品	不明				不明鉄製品。二又と環状の端部を持つか。
10-736	第44421	図版19-6	B層	MQ71	瓦	丸瓦				凸面はナガ調整。凹面は布目庄瓦。灰白色。焼成良好。軟質。
10-737	第41411	図版19-7	IV層	MQ66	赤褐色土器	壺	11.4	5.0	4.6	底部回転系切り無調整。体部内外面に煤状炭化物付着。被熱している。
10-738	第41422	図版19-8	IV層	MQ66	赤褐色土器	壺	13.2	4.9	4.0	底部回転系切り無調整。体部内外面に煤状炭化物付着。被熱している。
10-739	第41433	図版19-9	IV層	MP74	赤褐色土器	壺	12.4	6.0	3.9	底部回転系切り無調整。被熱している。
10-740	第41444	図版19-10	IV層	MN72 *	赤褐色土器	壺	12.4	6.6	4.1	底部回転系切り無調整。
10-741	第41455	図版19-11	IV層	MQ72	土製品	トイゴ羽口				先端部から全体部の破片。
10-742	第41466	図版19-12	IV層	MP72	土製品	縛				半分欠損。
10-743	第41467	図版19-13	IV層	MQ66	石製品	砾石				3面以上使用。凝灰岩製。
10-744	第41468	図版19-14	IV層	MQ72	鉄製品	鐵				先端部。茎部欠損。
10-745	第41469	図版19-2	IV層	MQ66	鉄製品	刀子				刃部欠損。
10-746	第41470	図版19-3	IV層	MQ66	鉄製品	鍊				完形。
10-747	第42481	図版20-4	V層	MP66	須恵器	壺			8.6	底部回転ヘタ切り後ナガ調整。
10-748	第42482	図版20-5	V層	MP66	須恵器	壺	13.8	9.2	3.4	底部回転ヘタ切り後ナガ調整。底部外縁に墨書き「内ヶ」。

III 第113次調査報告

1 調査経過

第113次調査は大畠地区西部を対象に、令和元年10月24日から10月30日まで調査を実施した。調査面積は6 m²である（第45図）。

第113次調査地は大畠地区西部の政庁西側、正殿と西脇殿の中間にあたる。当該地は、令和2年度に建設を計画する秋田城跡史跡公園連絡橋建設事業の東側橋台設置部分であり、その現状変更に伴い、事前調査を行い、地下構造および遺物包含層の状況について把握する必要があり調査を実施した。

調査区は橋台設置部分にかかるよう、トレーナーを設定し、調査を行った。調査は基準杭測量、調査区の設定後、人手によって表土の除去を行った。表土下には、近現代に造成されたと考えられる造成土層があり、次いで近世以降の堆積と考えられる旧耕作土層が検出された。（10月25日）旧耕作土を除去すると、地表から約2.6m下の地点で政庁域の古代整地層（上層整地層）が検出された。またその下層にも古代整地層（下層整地層）が検出された。上層整地層からは経年劣化した瓦片が2点出土しており政庁II期（8世紀後半）以降の整地層と考えられる。下層の古代整地層からは遺物の出土は確認されなかつた。古代整地層の下には地山粘土層が存在することを確認した（10月29日）。層序の記録化後、機材撤収および人手による埋め戻しを行い、調査を終了した（10月30日、第46図）。

調査区南西地点においては、削平を受けている状況が把握され、この地点より西側の斜面下部には整地層および遺構は存在していないことが確認された。

2 基本層序および各層出土遺物

基本層序（第46図）

調査地からは古代の遺構は検出されなかった。第113次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

調査地の西側は、旧国道の開削の際に大きく削平されており、東から西に急激に傾斜している。

第I層 表土：黒褐色砂質土（10YR3/2）。現表土。

第II層 造成土：暗褐色砂質土（10YR3/3）を主体に褐色砂質土（10YR4/4）に明褐色砂質土（10YR3/3）が混じる。

第III層 旧耕作土：褐灰色土（10YR4/1）。

第IV層 古代整地層：褐色砂質土（10YR4/6）。下部に褐色砂質土（7.5YR4/4）が薄く堆積。

第V層 古代整地層：褐色粘質土（7.5YR4/6）。

第VI層 地山：暗褐色粘質土（7.5YR3/4）。

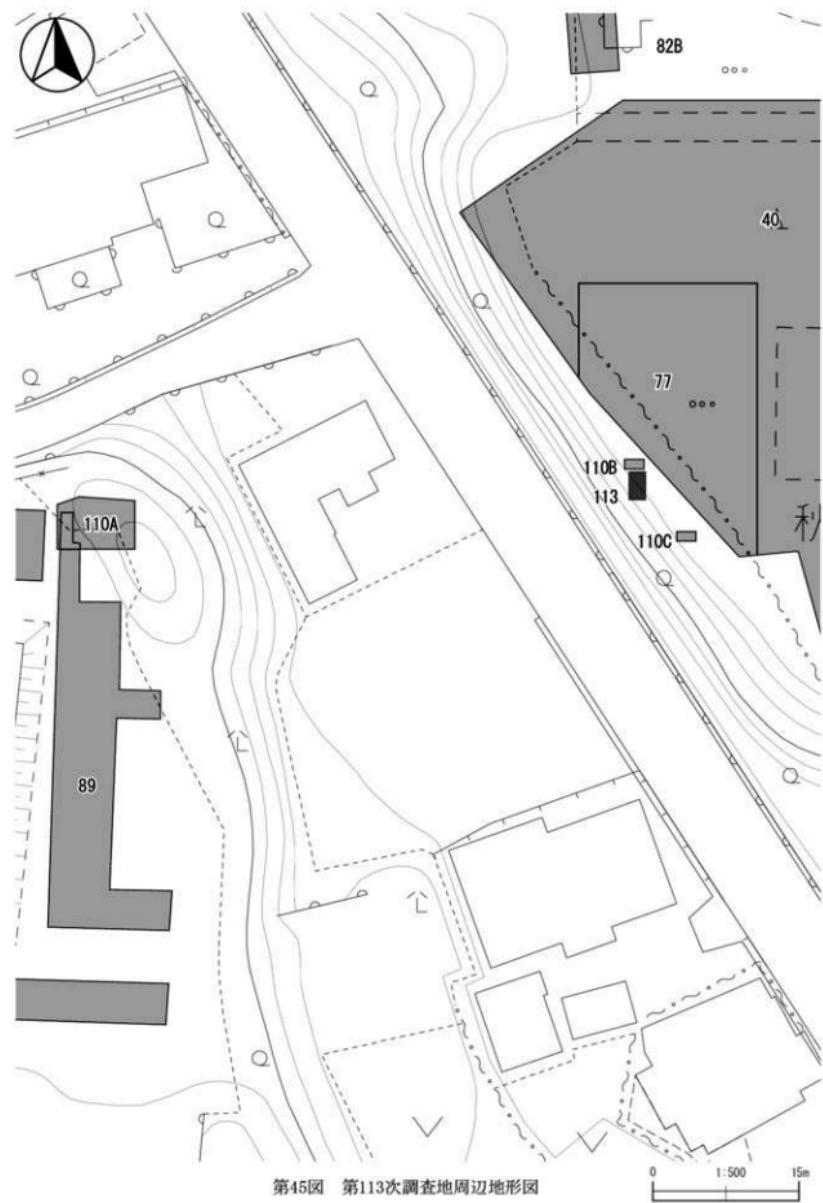
各層出土遺物

遺物の出土数量が少なく、また、破片が多く図化対象とならなかつたため、概略を以下に記述する。

第III層 肥前系磁器の青磁碗の破片が1点出土している。

第IV層 瓦片が2点出土している。

第V層 遺物の出土無し。



第45図 第113次調査地周辺地形図

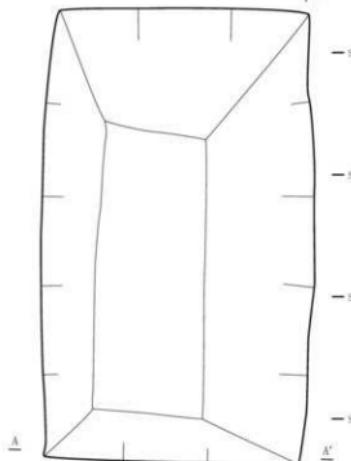


W52

W51(7)

W50

|w



S3

S4

S5

S6

A'

A''

W51(7)

W52

W50

47.3m

W51(7)

B

I

II

III

IV

V

VI

W-1

W-2

W-3

W-4

W-5

W-6

W-7

W-8

W-9

W-10

W-11

W-12

W-13

W-14

W-15

W-16

W-17

W-18

W-19

W-20

W-21

W-22

W-23

W-24

W-25

W-26

W-27

W-28

W-29

W-30

W-31

W-32

W-33

W-34

W-35

W-36

W-37

W-38

W-39

W-40

W-41

W-42

W-43

W-44

W-45

W-46

W-47

W-48

W-49

W-50

W-51

W-52

W-53

W-54

W-55

W-56

W-57

W-58

W-59

W-60

W-61

W-62

W-63

W-64

W-65

W-66

W-67

W-68

W-69

W-70

W-71

W-72

W-73

W-74

W-75

W-76

W-77

W-78

W-79

W-80

W-81

W-82

W-83

W-84

W-85

W-86

W-87

W-88

W-89

W-90

W-91

W-92

W-93

W-94

W-95

W-96

W-97

W-98

W-99

W-100

W-101

W-102

W-104

W-105

W-106

W-107

W-108

W-109

W-110

W-111

W-112

W-113

W-114

W-115

W-116

W-117

W-118

W-119

W-120

W-121

W-122

W-123

W-124

W-125

W-126

W-127

W-128

W-129

W-130

W-131

W-132

W-133

W-134

W-135

W-136

W-137

W-138

W-139

W-140

W-141

W-142

W-143

W-144

W-145

W-146

W-147

W-148

W-149

W-150

W-151

W-152

W-153

W-154

W-155

W-156

W-157

W-158

W-159

W-160

W-161

W-162

W-163

W-164

W-165

W-166

W-167

W-168

W-169

W-170

W-171

W-172

W-173

W-174

W-177

W-178

W-179

W-180

W-181

W-182

W-183

W-184

W-185

W-186

W-187

W-188

W-189

W-190

W-191

W-192

W-193

W-194

W-195

W-196

W-197

W-198

W-199

W-200

W-201

W-202

W-203

W-204

W-205

W-206

W-207

W-208

W-209

W-210

W-211

W-212

W-213

W-214

W-215

W-216

W-217

W-218

W-219

W-220

W-221

W-222

W-223

W-224

W-225

W-226

W-227

W-228

W-229

W-230

W-231

W-232

W-233

W-234

W-235

W-236

W-237

W-238

W-239

W-240

W-241

W-242

W-243

W-244

W-245

W-246

W-247

W-248

W-249

W-250

W-251

W-252

W-255

W-258

W-261

W-264

W-267

W-270

W-273

W-276

W-279

W-282

W-285

W-288

W-291

W-294

W-297

W-298

W-299

W-300

W-301

W-302

W-305

W-308

W-311

W-314

W-317

W-320

W-323

W-326

W-329

W-332

W-335

W-338

W-341

IV 考 察

1 第112次調査について

第112次調査地は焼山地区南西部、外郭線に近接した城内南西部の地点にあたり、周辺の調査で9世紀第2四半期～第4四半期に造営された城内区画施設跡を検出している。今次調査地はこの区画施設内南半部にあたり、鍛冶等生産施設に伴う遺構が存在する可能性が高い場所であった。焼山地区的正報告書作成および環境整備計画をふまえて、区画施設内の遺構の遺存状況や利用実態を確認すること目的に調査を実施した。

調査の結果、調査地全体で近世以降の歴跡や近現代の擾乱跡が多数検出され、古代の遺構面は大きく削平を受けている状況を確認した。遺存している古代遺構面は第III層から第V層の3面を確認し、城内施設を構成する鉄製品の生産・加工に関連する堅穴状遺構や焼土遺構などの遺構が検出された。全体として、掘立柱建物1棟、柱列1条、溝跡1条、堅穴状遺構1基、堅穴建物跡4軒、土坑7基、焼土遺構9基、不整形遺構1基が検出された。

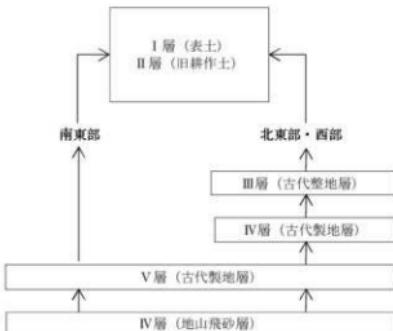
これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめる。

(1) 各遺物包含層の年代について

層序については、第II章3の基本層序で述べたが、再度調査地の地域ごとに土層の堆積状況をまとめると第47図のようになる。各層出土の年代比定資料をみていくと、第I層からはガラス片、碎石等の現代遺物が多数出土している。調査区周辺は近年まで秋田市水道局社宅地および畑地として利用されていた場所であり、また昭和初期には浄水場が存在していた場所である。そのため第I層は秋田市水道局社宅および浄水場の整備と解体撤去に伴う造成土であると考えられる。

第II層からは、17世紀後葉～18世紀後葉に位置づけられる肥前系陶器刷毛目紋碗（第39図11）や寛永通宝（第39図17）が出土している（註1、以下、遺物年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）。第II層では歴跡が検出されてであることから、第II層は近世以降の耕作土と考えられる。

第III層以下は、近世陶磁器・現代の遺物を含まず古代以前の遺物のみ出土していることから、古代以前の整地層であると考えられる。第III層からは法量が縮小し、作りが粗雑な10世紀第1四半期の赤褐色土器壙Aが出土して



第47図 第112次調査地層序堆積関係図

おり、10世紀第1四半期以降の整地層と考えられる（第40図4・5、註2・3）

第IV層は底形が縮小した9世紀第4四半期の赤褐色土器壺Aが出土している（第41図1・3）。その他の土器とともに、二次的な被熱が認められることから、元慶の乱（878）の火災で被災した後に造成土に混入したものと考えられる。それらのことから、第IV層は元慶の乱後の整地層である可能性が高い。

第V層からは8世紀第4四半期の口径13.8cm、器高3.4cmのヘラ切り後丁寧なナデ調整を施す須恵器壺が出土している（第42図1・2）。出土遺物の年代と、後述の第V層整地時期の遺構であると考えられるSI2550の年代をふまえると、8世紀第4四半期に行われた整地層であると考えられる。

（2）各遺構の年代について

第III層面検出遺構では、SK2533土坑から作りの粗雑な10世紀第1四半期の赤褐色土器壺Aが出土している（第7図1）。SK2534土坑からは9世紀第4四半期以降の赤褐色土器壺Aが出土している（第8図1）。SK2535土坑については、埋土から10世紀第1四半期の赤褐色土器壺Aが出土している（第9図1）。いずれの遺構からも底径比の縮小した赤褐色土器Aが出土しており、これらは9世紀第4四半期～10世紀第1四半期のものと考えられ、検出層位と大きく矛盾していないことから、第III層面検出の遺構は検出層位から、10世紀第1四半期以降の遺構と位置づけられる。

第IV層面の検出遺構では、調査区南西地点で検出されたSA2536柱列跡の埋土からは10世紀第1四半期以降の底径の縮小した赤褐色土器壺Aが出土している（第11図1）。調査区南西地点で検出されたSI2537堅穴建物跡の埋土からは10世紀第1四半期の成形の粗雑な、底径が縮小した赤褐色土器壺が複数出土している（第13図2・3・4・5・6）。また10世紀第1四半期以降と考えられる脚部が簡略化された三足土器の鉢が、カマド部分に据え置く形で出土している（第13図7）。これら出土遺物の年代や出土状況、遺構の切り合い関係から、SA2536柱列跡、SI2537堅穴建物跡は第III層整地直前に廃絶していることが想定される。これは後述する他の第IV層面検出遺構よりも年代観が新しいことから、第IV層面検出遺構には時期差があると考えられる。

調査区の北西地点で重複して検出されたSK2538土坑、SX2542焼土遺構からは年代を比定し得る遺物は出土していないが、検出層位から9世紀第4四半期以降に利用された遺構であると考えられる。SK2539～SK2541土坑の埋土からは底径が縮小した9世紀第4四半期以降の赤褐色土器壺Aが出土している（第15図1、第16図1・2・3・5、第17図1）。SX2543・SX2544焼土遺構からは年代を比定し得る遺物は出土していないが、近接した位置関係や切り合い関係からSX2543焼土遺構はSK2540土坑と、SX2544焼土遺構はSK2541土坑と同時に機能していたことが覗えるため、同時期の遺構であると考えられる。

第V層面検出遺構では、SB2545掘立柱建物跡の柱掘り方埋土から、9世紀第2四半期の口径13.2cm、器高3.2cmのヘラ切りナデ調整を施す須恵器壺が出土している（第22図1）。

SD2546溝跡の埋土からは9世紀第2四半期の被熱した赤褐色土器壺Aが出土している（第24図2）。羽口も出土していることから廃絶時はこの区画で生産活動が行われていた時期、もしくはそれ以後であると考えられる（第24図3）。連続すると考えられる99次調査時検出のSD2156溝跡は、区画施設を形成するSA2153材木跡より新しく、また9世紀第4四半期と考えられる赤褐色土器壺が出土していることから、当該遺構は区画施設が形成された9世紀第2四半期以降に掘り込まれ、9世紀第4四半期以降に機能を停止した溝跡であると考えられる（註4）。

SI2547堅穴状遺構埋土からは、法量の縮小が認められ、ヘラ切り後軽いナデ調整を施す9世紀第2四

半期の須恵器坏が出土しており、9世紀第2四半期以降の遺構であると考えられる（第26図1）。

SI2548・SI2549竪穴建物跡からは明確に年代を比定し得る遺物は出土していないが、SI2549竪穴建物跡から赤褐色土器片が出土しており、9世紀以降に位置付けられる。両遺構とも他遺構との位置関係やいずれも遺存状況が浅く、上層から掘り込まれたと考えられ、SI2547竪穴状遺構と同時期の9世紀第2四半期以降に利用されていた遺構であると考えられる。切り合い関係からSI2548竪穴建物跡が廃絶後、時期を置かずSI2549竪穴建物跡が構築されたと考えられる。

SI2550竪穴建物跡の埋土からはヘラ切り後、台を取り付けた須恵器台付坏や大型の双耳鉢が複数点出土している（第29図4・5・6）。いずれも8世紀第3四半期から第4四半期にかけての遺物であり、検出層位からも8世紀第4四半期の遺構であると考えられる。

SX2551焼土遺構の埋土からは、法量が大きく底径比が比較的大きい9世紀第3四半期の赤褐色土器坏Aが出土している（第31図1・2）。SX2552焼土遺構からは遺物は出土していないが、SX2551焼土遺構との位置関係から、機能的に関連する遺構であると考えられ、同時期の遺構であると考えられる。SX2553焼土遺構の埋土からは底部の縮小した9世紀第3四半期の赤褐色土器坏Aが出土している（第33図1）。SX2555焼土遺構からは遺物は出土していないが、SX2553焼土遺構との位置関係から同時期の遺構であると考えられる。これらの遺構の位置関係や検出層位、出土遺物から9世紀第3四半期以降に利用された遺構であると考えられる。SX2554焼土遺構は第V層面検出であるが、検出されている南西部が削平の影響が大きいことや、形状等に第IV層面検出のSX2544焼土遺構に類似性が見られることから、SX2544焼土遺構と同時期の遺構であると考えられる。SX2556不整形遺構の埋土からは底径の縮小した9世紀第4四半期の赤褐色土器坏Aが出土しており、9世紀第4四半期以降の遺構と考えられる（第35図1）。SX2557焼土遺構の埋土からは口縁部が単純化した9世紀第3四半期の長胴甕の破片が出土している（第37図1）。上部構造を第IV層によって削平されていることから、9世紀第3四半期の遺構であると考えられる。

以上をまとめると、第III層面検出遺構からは10世紀第1四半期以降、第IV層面検出遺構からは9世紀第4四半期以降、第V層面検出遺構からは8世紀第3四半期から9世紀第4四半期にかけての遺物が出土している。第V層面検出遺構においては出土遺物の年代に幅があるが、これは第IV層と第V層が整地されたと考えられる時期の差が大きいことをふまると、一部の遺構は上層整地層において掘り込まれたためと考えられる。第IV層整地前に、9世紀第2四半期～第4四半期に利用されたと考えられる遺構が掘り込まれた整地層が存在していたが、第IV層の整地や後世の削平によって失われてしまったため、これらの遺構の下部が残る形で第V層面において検出されたと考えられる。

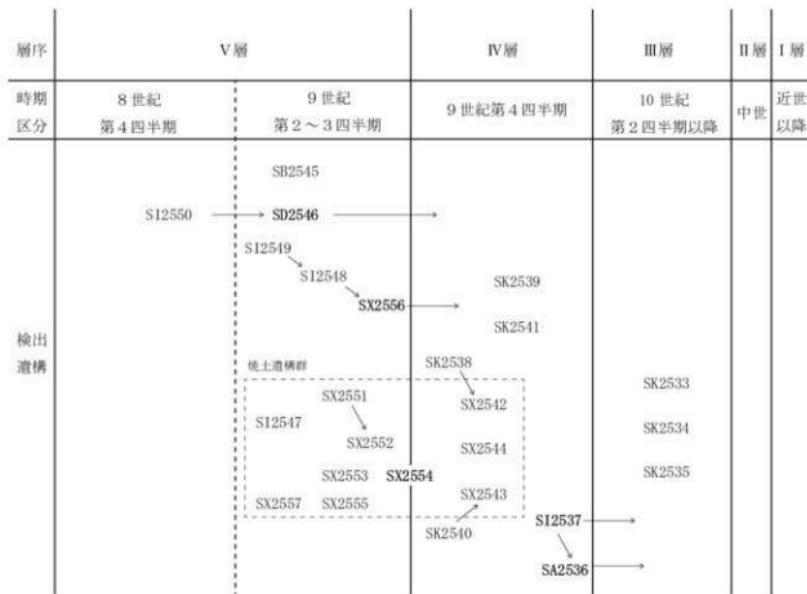
以上のことをふまえると、各遺構の年代は前述の各整地層の年代とほぼ一致しており、前後関係も含め矛盾しない。

（3）第112次調査地全体の利用状況と変遷について（第47図）

①第112次調査検出遺構の変遷および性格について

第112次調査において検出された遺構について、以上の年代の検討をふまえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表7のようになる（表7）。先述した年代を元に構成を整理し、秋田城遺構変遷を元に調査地の古代における利用状況を検討していく（表8）。

表7 第112次調査地遺構変遷表

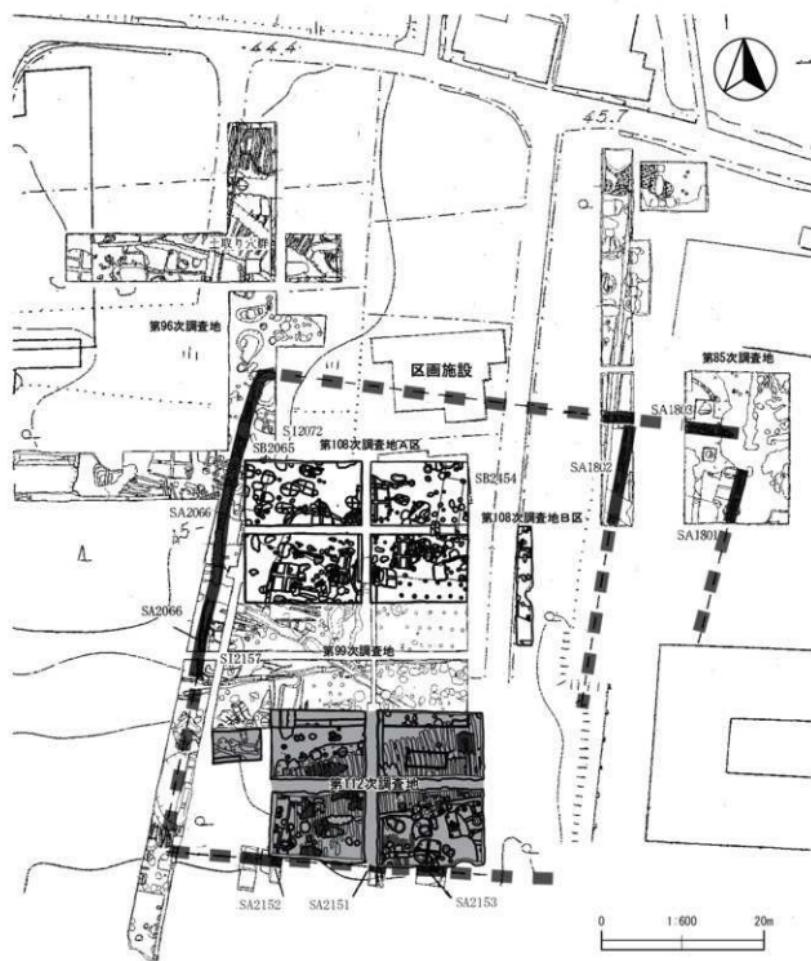


今次調査で検出された遺構で最も古いと考えられるのが、SI2550堅穴建物跡である。これまで周辺調査においては区画施設に近接、もしくは重なり合う箇所に一部8世紀代に遡るとされる掘立柱建物跡や焼土遺構が検出されているに留まっていた（註3・4・5）。今回の調査により区画施設機能前に、調査地南東点が居住域として利用される段階があることが確認された。

9世紀第2四半期以降の城内区画施設造営後の遺構としては、調査地北東側からは、桁行1間（1.8m）、梁間2間（2.7m+2.7m）のSB2545掘立柱建物跡が検出されている。時期は出土遺物から9世紀第2四半期以降に位置づけられ、方位規制が区画施設と同一であることから、区画施設が機能していた時代の建物であると考えられる。付近には同時期のSX2557焼土遺構が検出されており、関連性が窺える。

また、調査地南東側から検出された9世紀第2四半期のSI2547堅穴状遺構では、堅穴を掘り込んで、粘土を床や壁に貼り、壁の立ち上がり付近部に炉を造っていたことが確認された。埋土からは、鉄製品の他、焼土炭化物や鉄滓が出土していることから、上屋は確認されていないが、鍛冶など生産・加工に関わる活動を行っていた遺構と考えられる。またSI2548堅穴状建物跡・SI2549堅穴状建物跡は、いずれも床面が浅く遺存している状態であり詳細な性格等は不明だが、造成された時期や周辺遺構の時期や性格等から、簡易的な作業スペースだったことが想定される。

加えて、調査地中央から南西側にかけては、粘土面に焼土や炭化物面を伴う焼土遺構が複数検出され



第48図 焼山地区南西部遺構配置図

ている。くぼみを掘り込み、粘土を敷き、その上で火を使う作業をしていった生産に関連する遺構と考えられる。

以上のことから、9世紀第2四半期以降の区画施設造営後より、区画施設内南半の今次調査地においても鉄製品の生産・加工が活発に行われるようになると考えられる。

9世紀第4四半期以降の遺構としては、区画施設廃絶前後において少数の小型の焼土遺構が確認されている。また、調査地南西隅で検出されたSI2537堅穴建物跡は、東にカマドを伴う住居跡であり、方位は北で東に5°振れている。時期は生産施設群より新しい。過年度の周辺調査において、9世紀（第4四半期）以降は北で東に6°から10°振れる堅穴建物跡が確認されていることから、SI2537堅穴建物跡やSA2536柱列跡も同時期に作られたものであると考えられる。よって、調査地周辺は区画施設廃絶後、生産に関わる施設から一定の方位規制に基づく居住域としての性格を強めるものと考えられる。

②第112次調査地周辺の生産施設の展開について

第112次調査地では前述通り、炉を伴う堅穴状遺構や複数の焼土遺構が検出されている。これらの堅穴状遺構や焼土遺構については、遺構内や調査地内からフイゴ羽口、鉄滓や鉄製品の一部が出土している状況も踏まえると周辺調査地と同様に鍛冶などの鉄製品生産・加工に関係する生産施設としての性格を持つと考えられる。いずれも精円系もしくは不整形のプランを持ち、特に粘土によって構築されているものに関しては周辺調査で検出されているものも含め、一定の規格性が覗える。今次調査地で検出された遺構に関しては、後世の削平の影響が大きく遺存状況が非常に悪いが、そのことを勘案しても小規模な遺構であるものが多い。出土している鍛冶に関連すると見られる遺物もサイズが小さく、同じく鍛冶関連遺構が確認された大畠地区の城内東大路周辺の調査地と比べると鉄滓の量も少ない（註7・8）。

表8 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900	915	950
政庁	I期	II期	III期	IV/A期	IVB期	V期	VI期		
政庁区画施設	築地塀	築地塀 材木列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀		
外郭	I期	II期	III期 (小期あり)		IV期 (小期あり)	V期			
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀		柱列塀		材木列塀	大溝		
大畠地区	I期	II期	III期	IV期	V期				
		生産施設	生産施設整備 居住城住戸数増加		官衙建物				
燒山地区	I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫群	III期 (小期あり) C類建物 C類建物倉庫群		D類建物				
鶴ノ木地区	I期	II期	III期	IV期	V期				
外郭西門	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期			
時期	天平5年(733)～	8C後半前葉～	8C末・9C初 ～	9C第2四半期 ～	9C第3四半期～	元慶2年(878) ～	10C第2四半期 ～10C中葉		
備考	秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」改修期	第Ⅲ期全体 大改修期	天長7年 (830) 大地割復興期	元慶の乱で 焼失	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期		

これらのことから、今次調査地周辺で検出されている生産に関わる遺構は、鉄製品の大規模な生産等を行うのではなく、二次加工を行っていた可能性が考えられる。

(4) 第112次調査の成果と課題

以上第112次調査の結果により、今次調査地は、8世紀第4四半期にはSI2550のような竪穴建物が造営され、居住域として利用される段階があり、その後9世紀第2四半期から第4四半期にかけて方形の材木塀区画で囲われ、その中には竪穴建物や焼土遺構などの鉄製品の生産・加工関連施設が存在していたことが確認された。その後、これらが廃絶し、方位規制が正方位となって、竪穴建物群が造られ居住域として利用される状況へと変化したと考えられる。竪穴建物跡、焼土遺構、粘土に焼土を伴う焼土遺構などの検出遺構の構成は、周辺の調査成果とはほぼ同様となっている。

出土遺物からは、本格的な鍛冶を推測できる遺物や遺構が少なく、本格的な鍛冶操業による鉄製品生産が行われていたのではなく、簡易的な鉄製品の二次加工などが行われていたと考えられる。また、前述の工房的性格を持ち合わせた遺構の存在や円面鏡も一部出土していることから、生産に係わる実務官衙としての性格も持っていた可能性が考えられる。

今後はこれまでの調査成果に加え北側未調査地の把握も含め、区画施設内の機能と性格をより詳細に検討していく必要がある。

2 第113次調査について

第113次調査地は大畠地区西部の政庁西側、正殿と西脇殿の中間にあたる。当該地は、令和2年度に建設を計画する秋田城跡史跡公園連絡橋建設事業の東側橋台設置部分であり、その現状変更に伴い、事前調査を行い、地下遺構および遺物包含層の状況について把握する必要があり、調査を実施した。調査の結果、遺構や特筆すべき遺物の出土はなかった。

(1) 各遺物包含層の年代について

層序については、第Ⅲ章2の基本層序で述べた。第Ⅰ層、第Ⅱ層からは現代遺物が出土していることから、第Ⅱ層までは近現代の造成土であると考えられる。第Ⅲ層からは肥前系磁器碗の欠片が出土していることや、周辺調査地との層序の比較から、近世以降の旧耕作土であると推定される（註）。第Ⅳ層からは経年劣化した瓦片が2点出土しており政府II期（8世紀後半）以降の整地層と考えられる（註10）。第Ⅴ層からは遺物の出土は確認されなかったため、堆積状況から8世紀後半以前の整地層であると考えられる。

(2) 調査の成果

調査の結果、当該地点においては遺構が存在していないことから、正殿西側および西脇殿の北東側の空間地が把握された。調査区南西地点においては、削平を受けている状況が把握され、この地点より西側の斜面下部には整地層および遺構は存在していないことが確認された。

- 註1 これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
- 註2 これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。
小松正夫 1992「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）－第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして－」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.139-144
伊藤武士 1997「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7 pp.32-44
小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997年度秋田大会概要・律令国家・日本海シーンボジウムⅡ・資料集－』pp.18-30
秋田市 2001「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』pp.383-390
秋田市教育委員会 2007「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡II－鶴ノ木地区－』pp.340-345
神田和彦 2010「ケズリのある赤い壺—古代秋田郡域の赤褐色土器壺B－」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp.187-210
- 註3 赤褐色土器の呼称と壺A・Bの分類については、酸化炎焼成、非内黒、ロクロからの切り離しが回転、静止系切りのものを赤褐色土器とし、壺類の底部から体部下端および下年にかけてケズリ調整を施すものを壺B、無調整のものを壺Aとしている。
- 註4 秋田市教育委員会2011『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2010』
- 註5 秋田市教育委員会2012『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2011』
- 註6 秋田市教育委員会2018『秋田城跡 秋田城跡歴史資料館年報2017』
- 註7 秋田市教育委員会2006『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2005』
- 註8 秋田市教育委員会2017『秋田城跡 秋田城跡歴史資料館年報2016』
- 註9 秋田市教育委員会2002『秋田城跡 平成13年度秋田城跡調査概報』
- 註10 秋田市教育委員会2009『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008』
出土瓦については表9に基づき分類した。

表9 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	焼成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政序Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色			・砂粒が多い		
	1-3群	黒色（いぶし焼成）			・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か		
2群		青灰・灰・暗灰	良好・堅緻	硬質		政序Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯跡産か	政序Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰					
	4-1群	橙色系を主体					
4群	4-2群	黄灰・ に茶い黄灰～褐色	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政序Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降

※秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

V 秋田城跡環境整備事業

令和元年度の整備

今年度も昨年同様、これまで整備を進めてきた外郭東門地区や政庁地区、水洗廻舎を復元した鶴ノ木地区を面的に結ぶため、平成22年度から行っている城内東大路の復元を行った。また、市道により削平されている東側史跡公園と歴史資料館を結ぶため計画されている、史跡公園連絡橋建設のための事前準備として連絡橋の詳細設計を行った。

環境整備工事の概要は次のとおりである。

実施地区 大畠地区

整備面積 141m²

工 種	細 目	数 量	金 額(千円)	備 考
敷地造成工	盛 土 工	1 式	180	山砂盛土
	法 面 工	1 式	22	機械築立整形、人工芝張芝
施設整備工	遺跡表示工	1 式	2,170	大路表示 (W=13.5m、L≈8.1m)
直接工事費計			2,372	



城内東大路完成（東から）

VI 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、令和元年度は下記の事業を実施し、全体で7,238名の参加者がいた。

1 学習講座（前期5月23日～25日、後期2月6日・7日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう講座を開催した。秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。参加者、前期19名、後期30名。

2 史跡探訪会（6月22日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者14名。

3 発掘体験教室（7月27日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者16名。

4 史跡秋田城跡パネル展（8月1日～9月1日・秋田市ポートタワーセリオン、9月14日～9月29日・秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、11月27日～12月13日・秋田市役所1階市民ホール）

市内の観光施設および商業施設の展示会場3箇所で、一般市民を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布した。平成31年度のテーマは「古代城柵秋田城のみどころ」で行った。見学者は、ポートタワー セリオン390名、民俗芸能伝承館387名、秋田市役所1階市民ホール1,119名。

5 第112次発掘調査現地説明会（8月24日）

令和元年度に寺内焼山地区で行われた第112次発掘調査の成果を公開した。参加者70名。

6 史跡散策会（9月14日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者17名。

7 東門ふれあいデー（10月6日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催した。参加者2,715名。

8 史跡めぐり（10月19日）

秋田城周辺を文化財や伝承などについて講師の解説を聞きながら歩いてもらい、史跡公園以外の史跡指定地域の魅力を伝えることを目的として準備をすすめていた。悪天候のため中止となった。

9 出前講座（7月19日・高清水小学校6年生）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数47名。

10 歴史資料館企画展（前期7月20日～8月25日、後期12月21日～2月2日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的として開催した。テーマはそれぞれ、前期「秋田城と古代仏教」、後期「秋田城とその時代」で行った。見学者は前期1,745名、後期584名。また前期企画展関連事業として、前期企画展示に関係するテーマの講演会を行った。参加者85名。



1 學習講座



2 史跡探訪会



3 発掘体験教室



4 パネル展（市役所市民ホール）



5 第112次調査現地説明



6 史跡散策会



7 東門ふれあいデー



10 後期企画展「秋田城とその時代」

VII 秋田城跡現状変更

秋田城跡歴史資料館では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすとともに、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

平成31年1月～令和元年12月の現状変更申請は30件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

- ①民間工事17件…住宅解体・新築（1・5・14・15・17・27・28・30）、外構等整備（6・7・18・25・26）、電柱等工事（8・13）、ガス管入取替（16）、宅地造成（29）
- ②公共工事2件…既設文化財説明板撤去・再設置（4）、電灯柱の改修・設置（10）
- ③史跡の保護や保存に係わるもの11件…発掘調査（2・24）、環境整備（3）、法面対策及び地下水処理（9）、埋設管路等構築（11・12・19・20・22・23）、桜植栽（21）

表10 現状変更一覧

番号	申請者	申請種別	変更箇所	申請年月日	許可年月日、番号	結果
1	個人	内丸小字御前番2	住宅解体・新築	平成31年1月27日	平成31年1月27日、秋市教令第1号	立ち退き
2	秋田市長	内丸山8番	発掘調査	平成31年2月6日	平成31年3月10日、秋市文第4号	発掘調査
3	秋田市長	内丸山8番内	史跡の整備	平成31年2月8日	平成31年3月10日、秋市文第4号	立ち退き
4	秋田市長	内丸小字御前13番	既設文化財説明板撤去・再設置	平成31年2月15日	平成31年2月19日、秋市教令第8号	企画検査
5	個人	内丸御前8番2	住宅解体	平成31年3月21日	平成31年2月26日、秋市教令第9号	企画検査
6	個人	内丸8番1号	発掘調査	平成31年3月6日	平成31年3月22日、秋市教令第10号	企画検査
7	個人	内丸8番1号4番・34番2	物置小屋新築	平成31年3月29日	平成31年4月1日、秋市教令第11号	企画検査
8	東北電力株式会社	内丸御前二丁目番2番	電柱立上げ	平成31年4月2日	平成31年4月4日、秋市教令第12号	企画検査
9	秋田県秋田城跡周辺地区	内丸御前8番3番地内	山面対策及び地下水流施設	平成31年4月11日	平成31年4月17日、秋市文第4号	企画検査
10	秋田市長	内丸山6番2、7番地内	駐在官の住居・施設	平成31年4月11日	令和元年9月12日（許可変更）	企画検査
11	東北電力株式会社	内丸山5番1	電柱立上げ	令和元年5月31日	令和元年5月31日、秋市教令第13号	企画検査
12	東北電力株式会社	内丸山6番2	電柱立上げ・定期点検	令和元年5月31日	令和元年6月4日、秋市教令第14号	企画検査
13	東北電力株式会社	内丸小字御前番	電柱立上げ・地盤強化	令和元年6月13日	令和元年6月13日、秋市教令第15号	企画検査
14	個人	内丸8番3番	住宅解体	令和元年6月14日	令和元年6月14日、秋市教令第16号	企画検査
15	個人	内丸8番12番1	住宅解体・新築	令和元年6月14日	令和元年6月14日、秋市教令第17号	企画検査
16	東北ガス株式会社	内丸8番1号220番	ガス管入取替	令和元年7月10日	令和元年7月10日、秋市教令第18号	企画検査
17	個人	内丸小字御前2番	住宅解体	令和元年7月10日	令和元年7月10日、秋市教令第19号	企画検査
18	個人	内丸小字御前1番6	ブロック解体・コンクリート工事	令和元年7月10日	令和元年7月22日、秋市教令第20号	企画検査
19	東北電力株式会社	内丸御前二丁目1番2、7番2、7番3、7番4番地内	既設井の整備	令和元年7月10日	令和元年7月26日、秋市文第4号	企画検査
20	秋田市教科書センター	内丸山1番1、7番2、7番3、7番5番	既設井の整備	令和元年8月6日	令和元年8月20日、秋市文第4号	企画検査
21	レーベン	内丸8番1番2	既設井の整備	令和元年8月6日	令和元年8月22日、秋市教令第21号	企画検査
22	秋田市教科書センター	内丸山8番地先	埋設物等構築	令和元年8月20日	令和元年8月22日、秋市教令第22号	企画検査
23	東北電力株式会社	内丸山7番地先	埋設物等構築	令和元年8月26日	令和元年8月27日、秋市教令第23号	企画検査
24	秋田市長	内丸8番1番5	発掘調査	令和元年9月12日	令和元年10月10日、秋市文第4号	発掘調査
25	個人	内丸小字御前2番	ブロック設置・コンクリート打設	令和元年9月14日	令和元年9月18日、秋市教令第25号	企画検査
26	個人	内丸8番1番3	コンクリート打設	令和元年9月14日	令和元年9月18日、秋市教令第26号	企画検査
27	個人	内丸御前10番1、10番2	住宅解体	令和元年10月10日	令和元年10月25日、秋市教令第27号	企画検査
28	個人	内丸小字御前2番6	住宅解体	令和元年10月10日	令和元年10月30日、秋市教令第28号	企画検査
29	個人	内丸御前10番10、11番	史跡造営（L型脚手架工事・瓦張り・壁面修復）	令和元年11月14日	令和元年11月28日、秋市教令第29号	企画検査
30	個人	内丸小字御前10番1、10番2	住宅解体・土下石剥引	令和元年11月24日	令和元年11月25日、秋市教令第30号	企画検査



①第112次調査地第V層面全景（東から）



②第112次調査地第V層面全景（北から）

第112次調査地

図版 1



①第112次調査地第V層面全景（西から）



②SI2547堅穴状構掘り下げる状況（北から）

図版2

第112次調査地



①調査前状況（北西から）



②第Ⅱ層面検出状況（東から）



③第Ⅱ層～第Ⅴ層面検出状況（東から）

第112次調査地

図版 3



①第III層面検出状況（東から）



②SK2533土坑半裁状況（東から）



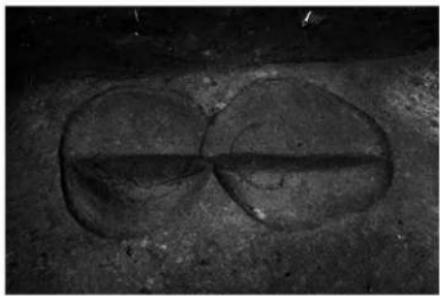
③SK2534土坑半裁状況（東から）



④SK2535土坑半裁状況（北から）



⑤SA2536柱列跡柱検出状況（南から）



①SA2536柱跡柱掘方半裁状況（東から）



②SA2536柱跡柱掘方半裁状況（東から）



③SI2537堅穴建物跡掘り下げ状況（北から）



④SI2537堅穴建物跡掘り下げ状況（東から）



⑤SI2537堅穴建物跡カマド断ち割り状況（西から）



⑥SK2538土坑半裁状況（北から）



⑦SK2539土坑半裁状況（南から）



⑧SK2540土坑半裁状況（北から）

第112次調査地



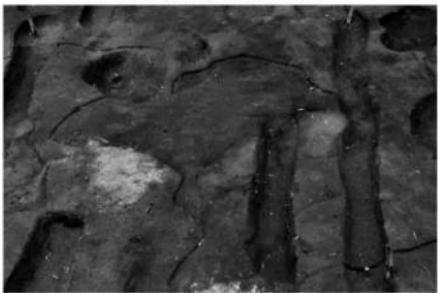
① SK2541土坑半裁状況（東から）



② SX2542焼土遺構半裁状況（北から）



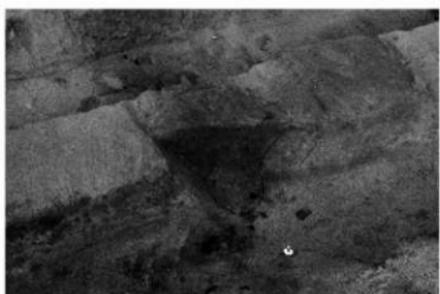
③ SX2543焼土遺構半裁状況（北から）



④ SX2544焼土遺構半裁状況（北から）



⑤ SB2545掘立柱建物跡（南から）



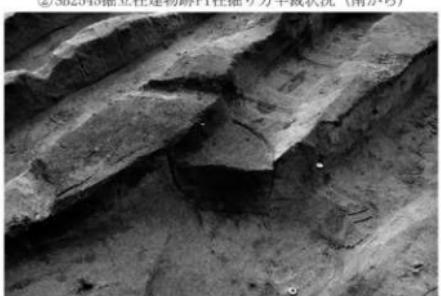
①SB2545掘立柱建物跡P4柱掘り方半裁状況（西から）



②SB2545掘立柱建物跡P1柱掘り方半裁状況（南から）



③SB2545掘立柱建物跡P2柱掘り方半裁状況（西から）



④SB2545掘立柱建物跡P3柱掘り方半裁状況（南から）



⑤SD2546溝跡掘り下げ状況（西から）



⑥SD2546溝跡断面（東から）



⑦SD2546溝跡断面（東から）



①SI2547堅穴状遺構掘り下げ状況（西から）



②SI2547堅穴状遺構掘り下げ状況（南から）



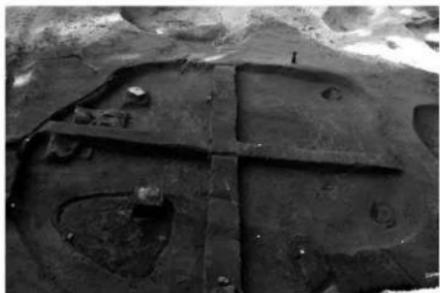
③SI2547堅穴状遺構炉跡半裁状況（南から）



④SI2548・S12549堅穴建物跡掘り下げ状況（南から）



⑤SI2548・S12549堅穴建物跡掘り下げ状況（東から）



① SI2550堅穴建物跡掘り下げ状況（南から）



② SI2550堅穴建物跡掘り下げ状況（西から）



③ SI2550堅穴建物跡遺物出土状況（西から）



④ SI2550堅穴建物跡遺物取り上げ後状況（南から）



⑤ SX2551焼土遺構検出状況（南から）



⑥ SX2552焼土遺構検出状況（南から）



⑦ SX2551焼土遺構掘り下げ状況（北から）



⑧ SX2551焼土遺構掘り下げ状況（東から）



① SX2553焼土遺構検出状況（北から）



② SX2554焼土遺構検出状況（西から）



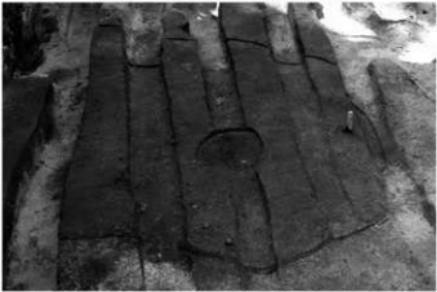
③ SX2555焼土遺構検出状況（北から）



④ SX2556焼土遺構検出状況（南から）



⑤ SX2557焼土遺構検出状況（北東から）



⑥ SX2557焼土遺構検出状況（北から）



⑦ 拡張区旧耕作土除去後状況（北から）



⑧ 拡張区北壁土層断面（北から）



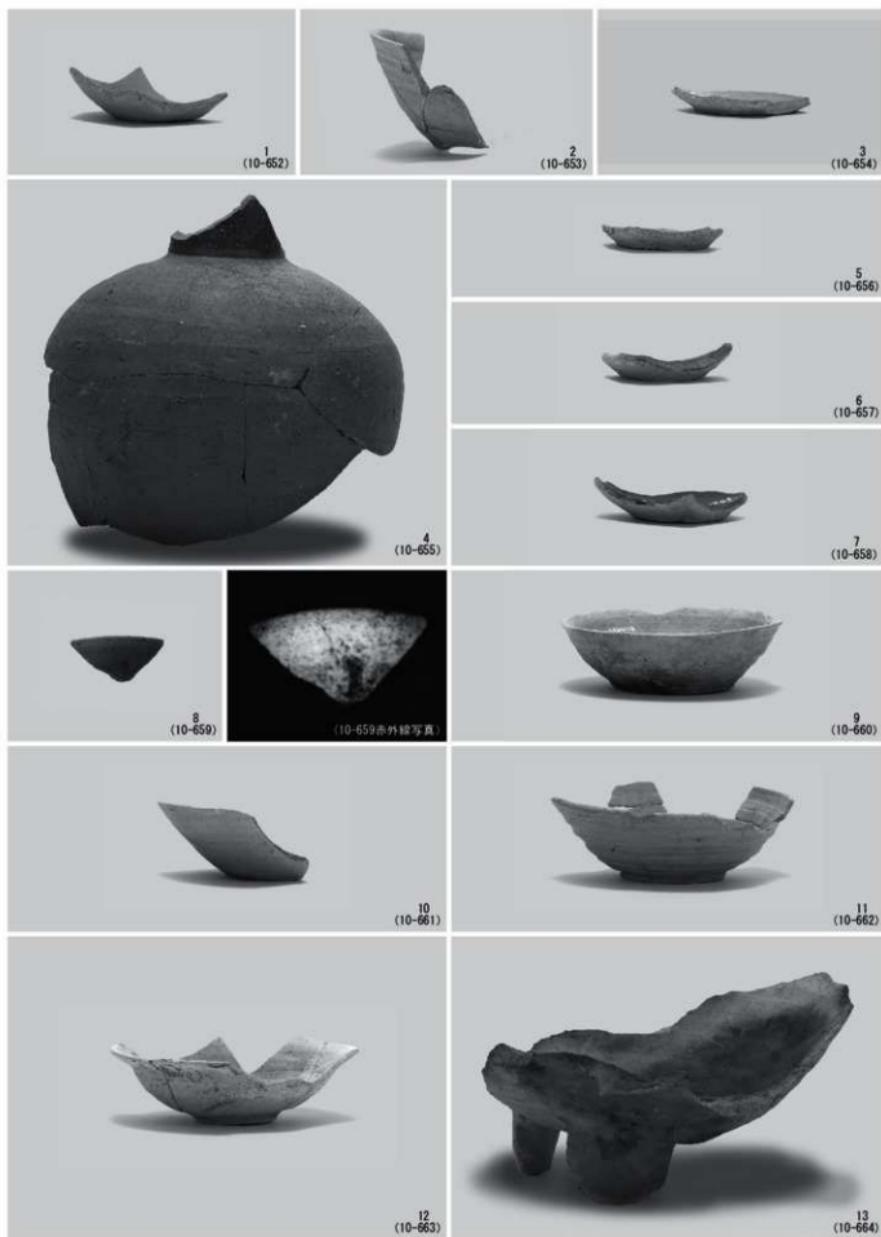
①調査前状況（東から）



②第IV層面検出状況（南東から）



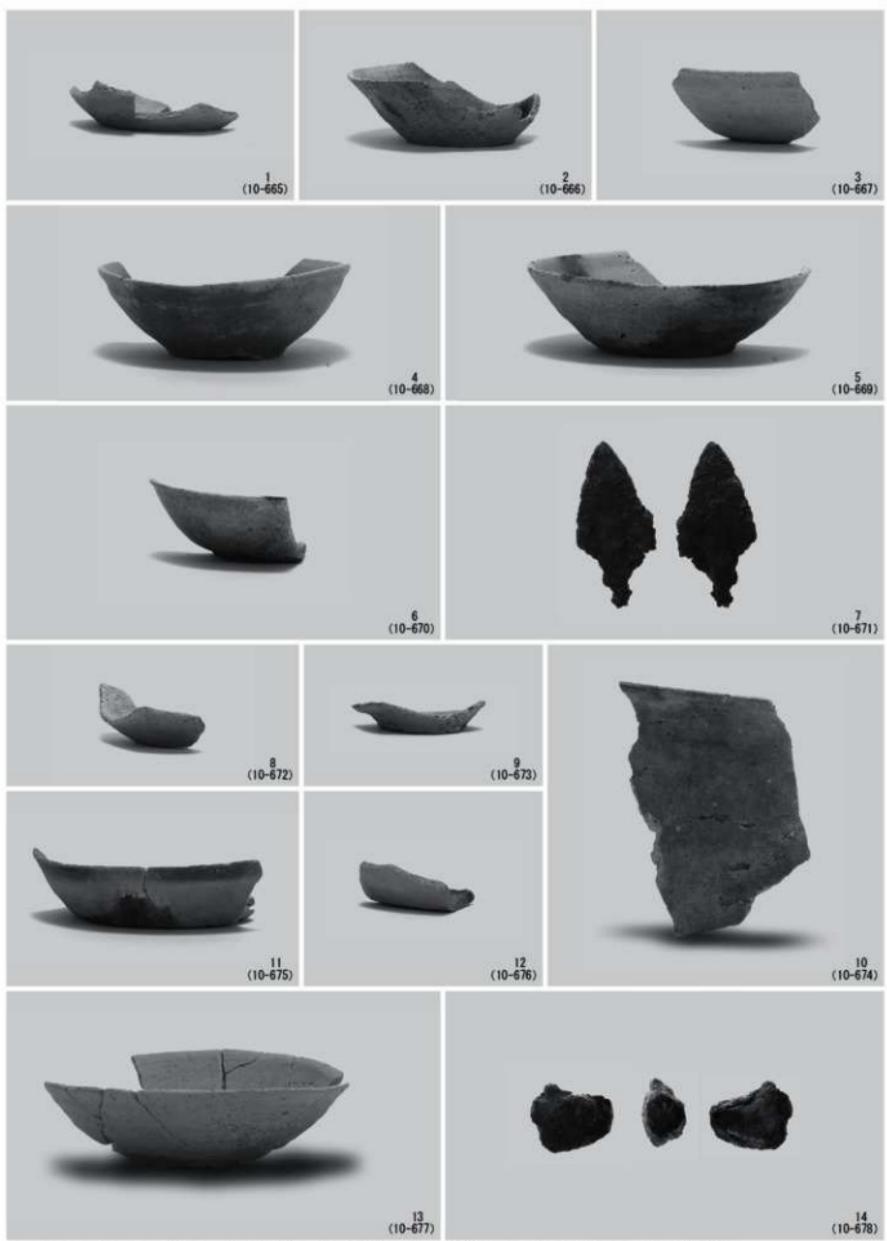
③第V層面検出状況（北から）



1・2 SK2533、3 SK2534、4・5 SK2535、6 SA2536、7～13 SI2537 (すべてS=2/5)

図版12

第112次調査地出土遺物（遺構内）



1 SK2539, 2~7 SK2540, 8 SK2541, 9 SX2543, 10 SX2544, 11 SB2545P 3, 12~14 SD2546
(7はS=1/2、それ以外はS=2/5)

第112次調査地出土遺物（遺構内）

図版13



1
(10-679)



2
(10-680)



3
(10-681)



4a
(10-682内面)



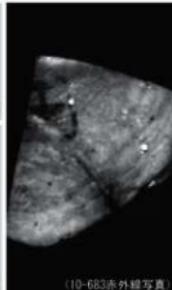
4b
(10-682)



5a
(10-683)



5b
(10-683底面)



(10-683赤外線写真)



6
(10-684)



7
(10-685)



8
(10-686)

1～3 SI2547、4～8 SI2550 (3はS=1/2、それ以外はS=2/5)

図版14

第112次調査地出土遺物（遺構内）



1
(10-687)



2
(10-688)



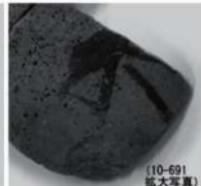
3
(10-689)



4
(10-690)



5
(10-691)



6
(10-691)
拡大写真



6
(10-692)



7
(10-693)



8
(10-694)



9
(10-695)



10
(10-696)

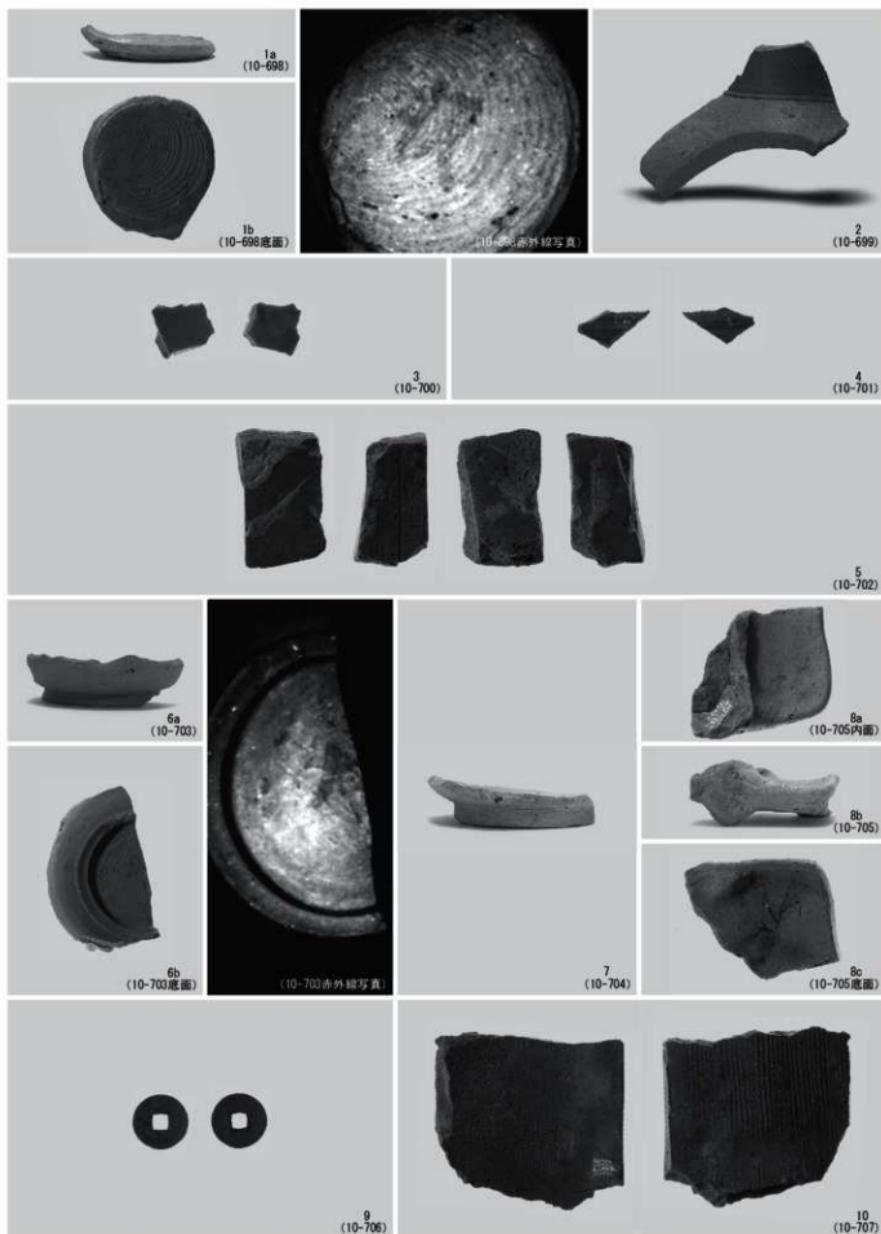


11
(10-697)

1・2 SI2550、3～7 SX2551、8・9 SX2553、10 SX2556、11 SX2557 (7はS=1/2、それ以外はS=2/5)

第112次調査地出土遺物（遺構内）

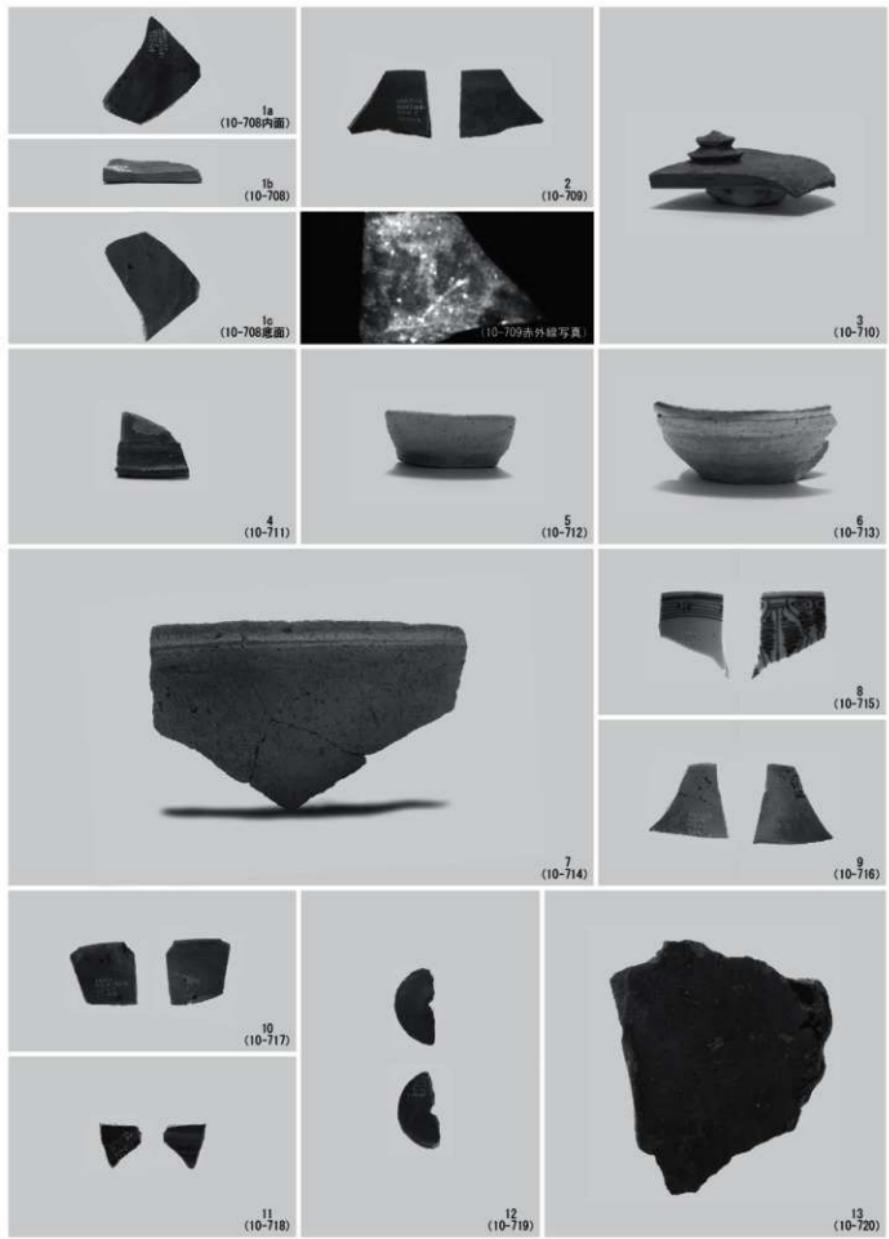
図版15



1~5 第I層、6~9 第I層擾乱、10 第I層 (5・9はS=1/2、10はS=1/4、それ以外は2/5)

図版16

第112次調査地出土遺物（第I層）



1～13 第II層 (すべてS=2/5)

第112次調査地出土遺物（第II層）

図版17



1
(10-721)



2
(10-722)



3
(10-723)



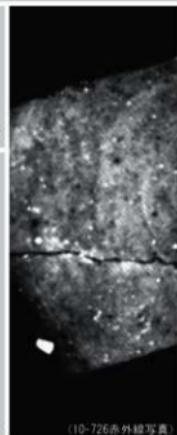
4
(10-724)



5
(10-725)



6a
(10-726)



6b
(10-726内面)

6c
(10-726外縁写真)



7
(10-727)



6b
(10-726内面)



8
(10-728)



9
(10-729)

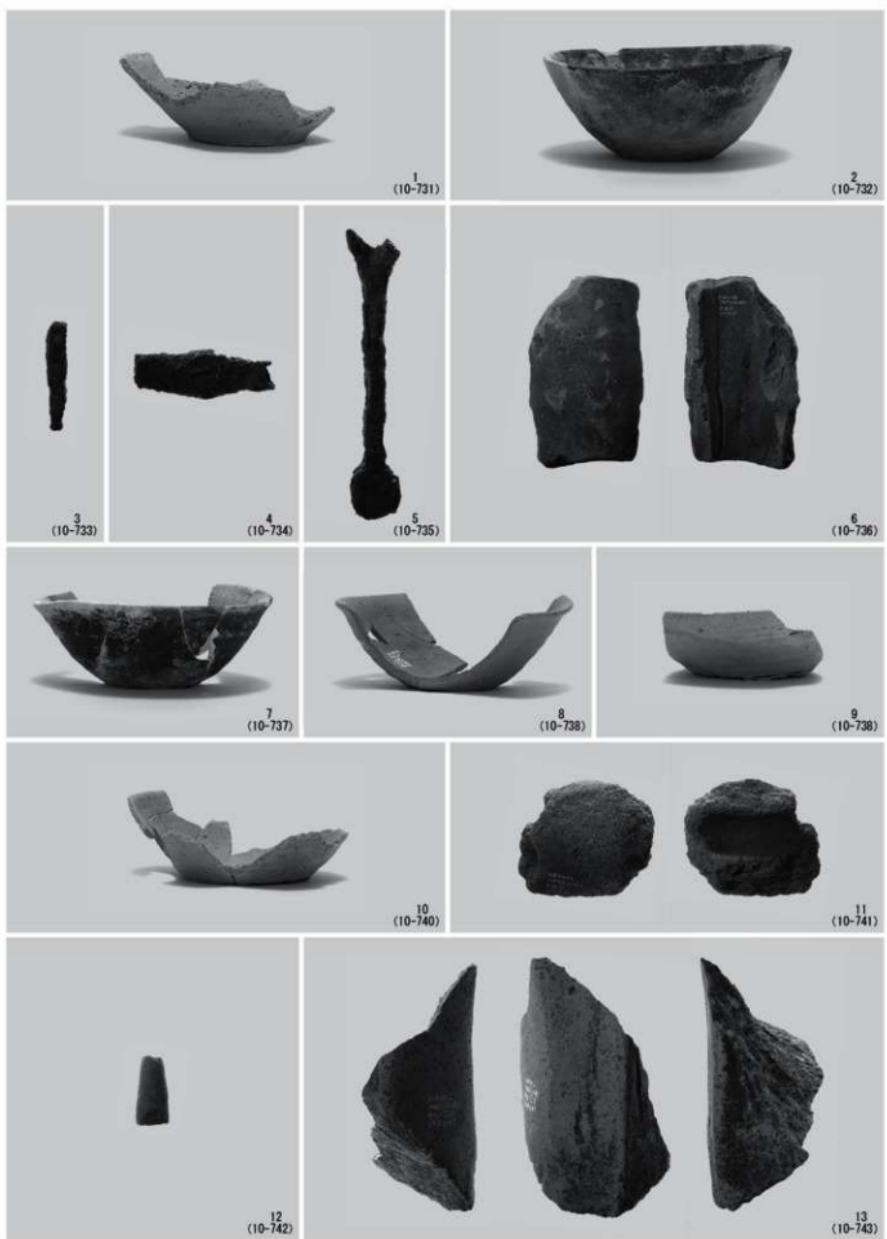


10
(10-730)

1~4 第II層、5~10 第III層 (1~4はS=1/2、それ以外はS=2/5)

図版18

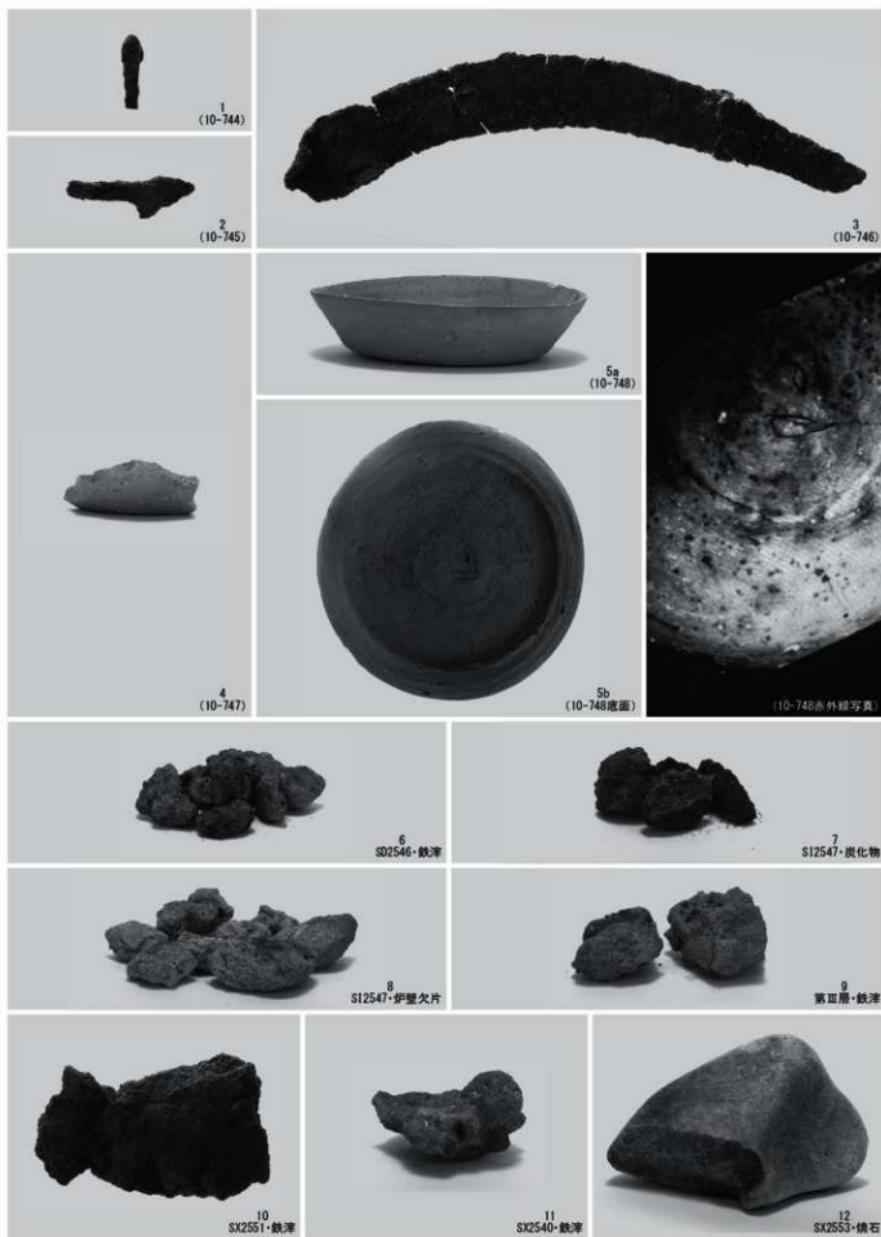
第112次調査地出土遺物 (第II層・第III層)



1～6 第III層、7～13 第IV層 (3～5・13はS=1/2、6はS=1/4、それ以外はS=2/5)

第112次調査地出土遺物（第III層・第IV層）

図版19



1~3 第IV層、4~5 第V層、6~12 參考遺物 (1~3はS=1/2、それ以外はS=2/5)

図版20

第112次調査地出土遺物 (第IV層・第V層・参考遺物)

報告書抄録

ふりがな	あき た じょう あと												
書名	秋田城跡												
副書名	秋田城跡歴史資料館年報2019												
卷次	2019												
シリーズ名	秋田城跡歴史資料館年報												
シリーズ番号													
編著者名	伊藤武士、松下秀博、児玉駿介、佐藤桃子												
編集機関	秋田市立秋田城跡歴史資料館												
所在地	〒011-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号 TEL: 018-845-1837 FAX: 018-845-1318												
発行年月日	2020年3月												
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査 原因					
秋田城跡	秋田市 秋田市寺内	市町村	遺跡番号	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第112次 20190508 ～ 20190927	564	保護管理					
		05201	186			第113次 20191024 ～ 20191030		現状変更					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項						
秋田城跡 第112次調査	城柵官衙 遺跡	奈良～ 平安	掘立柱建物1棟、柱列跡1条、溝跡1条、堅穴状遺構1基、堅穴建物跡4軒、土坑7基、焼土遺構9基、不整形遺構1基			須恵器、土師器、赤褐色土器、陶磁器、瓦、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、銭貨	城内区画施設の調査						
秋田城跡 第113次調査	城柵官衙 遺跡	奈良～ 平安				近世磁器、瓦	政府西部の調査						
要約	第112次調査では、城内区画施設と時期を同一にする、鉄製品の生産・加工関連施設と考えられる堅穴状遺構や焼土遺構群、堅穴建物跡、掘立柱建物跡を検出した。また、城内生産・加工関連施設以前の居住域としての利用を示すと考えられる堅穴建物跡や、廃絶後に造営されたと考えられる柱列跡や堅穴建物跡を検出し、焼山地区南西部の利用状況の変遷と実態の一部を把握した。												
	第113次調査では、環境整備に伴い地下遺構および遺物包含層の状況について把握するため調査を実施したが、古代の遺構は検出されなかった。また調査地西側から斜面下部に向かって削平を受けている状況を確認し、調査地より西側には遺構が存在していないことを確認した。												

秋田城跡歴史資料館要項

I 組織規定

秋田市立秋田城跡歴史資料館条例 拠粹（平成27年12月21日 条例第62号）

第1条

史跡秋田城の保護および管理、調査研究、整備、公開ならびに活用を通じ、市民の教育と文化の向上に資するため、秋田市立秋田城跡歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）を秋田市寺内焼山9番6号に設置する。

第2条

歴史資料館において行う事業は、次に掲げるものとする。

- (1) 史跡秋田城跡の保護および管理に関すること。
- (2) 史跡秋田城および関連遺跡の調査研究に関すること。
- (3) 史跡秋田城の整備および公開に関すること。
- (4) 史跡秋田城跡および関連遺跡の出土品および調査成果の展示および普及に関すること。
- (5) 史跡秋田城跡についての学習活動の支援等に関すること。
- (6) 関係機関および関係団体等との連携に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、歴史資料館の設置の目的を達成するために必要と認める事業。

II 発掘調査体制

1 調査体制

秋田市

秋田市長	徳 積 志
観光文化スポーツ部長	古 仲 環

調査機関

秋田市立秋田城跡歴史資料館

館長	佐々木 吉 丸		
事務長	伊 藤 武 士		
調査・普及担当		管理運営担当	
主席主査	松 木 仁	主席主査	宇佐美 喜 志
主事	児 玉 駿 介	主査	松 下 秀 博
主事	佐 藤 桃 子	主査	三 浦 龍
嘱託	阿 部 美 徳	主任	工 藤 伸 吾
嘱託	今 野 祥 子		

2 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡歴史資料館年報2019）

印刷・発行 令和2年3月
発 行 秋田市教育委員会
編 集 秋田市立秋田城跡歴史資料館
〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号
TEL 018-845-1837 FAX 018-845-1318
印 刷 秋田印刷製本株式会社

